

求道

第壹卷
第七號

求道第一卷第七號

目次

◎出征軍人に與ふるの書	(社説)	藤井專隨
◎他力奮勵主義	日曜講話	近角常觀
◎蘭林遊戲の眞趣味	▲永井壽江君を吊する辭 同一趣味	近角常觀
◎永遠の問題		百日本劍虹
◎無題錄		鈴木卓苗
◎有絃無絃		無絃生
◎南村閑話	風尚餘韻	一記者
◎麥藁笛		吟二
◎覽鏡		菊池曉汀
◎熾屏樓日誌		劍虹

政教時報

◎編輯だより◎同人消息
◎巢鴨監獄を觀る
◎出征軍人に與ふるの書 (其二)

劍虹生



七八兩月休講仕候

本求道學會
* * * * *
九段第二求道會

求道

第七卷

出征軍人に與ふるの書

求

道

(一)

謹啓
大光照耀の下益々御健勝にて爲法御靈蔭の御事と奉遙賀候。降て不肯儀今般日露開戦に付、去る〇月充員下令召集に相成、後備歩兵第〇〇聯隊第〇〇隊へ編入相成候。日頃求道に怠り勝なる不肖適切に御佛之啓覺と存し、此機に乗上より特別之御慈悲を以て、今回異邦に赴く余に何卒、何卒、適切なる御教示を願度幾重にも奉懇願候。

余之和上に拜眉を得ざる以前木村にて、最も教導に熱誠なる佐々木津喜氏當地の禪寺に於て連日講話有之候。其終の日同友の茶話會も有之候。其都度和上の著述信仰の餘瀝を得て繰返し拜讀仕り大に和上の實験に感佩致し候、以後佐々木氏より政教時報を拜借し、猶精神界に依り修養の途にあり候得共、如何にせん余の最大罪惡の塊なる之を掃蕩する能はず、只是をして一分時たりとも忘却する能はず、唯々萬尋の暗黒城裡に鎖され、三毒の大敵に刺撃せられ居候。偶々佛陀の閃光に接するも極めて微かなる如き感を得るも、候々萬尋の苦悶交々襲ひ來りて、主觀的に御佛の慈光に包まる如き感無之、日々不安の思ひをなし候。實に申すも耻しき至極に存候。夫より客年和上の北陸御巡回の砌不肯菩提所なる太田村眞宗寺へ御教導の勞を惠まれて幸に參聽する事を得、猶同日茶話會より南條組正得寺にて御教示に預り、親しく御佛の御慈悲を御教導被下、其節和上より(利劍即是彌陀名號)の尊書を拜戴仕り候。實に余の心根に適切なる御教書尊き佛陀の御慈與と雖有存候。殊に遺憾なるは和上の御教導の求道本年二月より購讀致し居り候處、今回の召集にて御別離申上候。然れども同友の郷里にて求道に接し居るを喜び居り候、幾重にも佛の御教佛の御慈悲をば生れ落ちし時より聽聞仕候得共、今回の如き非常の事變に際して一際亦新しく感想湧出致し禁するを得ず。何卒不肖の願を哀み御教導の勞に預り度重て奉懇願候也。敬白。

近角 常規 様

後備歩兵第〇〇隊第〇〇隊 北條 幸 作

猶御願申上候小生等の出發今眼前にせまり居候間、御繁忙の中恐縮の至に候得共御返事御願上候。

謹啓、貴氏御安否如何に候哉、定めて焔烟彈雨の間に稱名念佛を力として、爲國家御報効之御事と存じ奉り候、幸に大悲の御祐助を以て此書の貴氏の手に渡らむことを切に祈念仕候。御來書によれば本年〇〇貴氏御召集の頃は恰も拙父示寂致候時に有之候。即〇月〇〇日午後八時半に候。貴書の不肖の手に廻送せられし時は恰も忌中多忙の際とて執筆の暇なく、且つ貴氏之宿所書き方不明之爲めツイ延引相成申候。又貴隊〇〇〇通過の際も友人訪問の爲め参り候處、誤て新橋に出て貴氏とも面會の機を失し候次第に候。定めて貴氏は唯今〇〇方面に御向ひ爲成候と存候。此書の手に入るは果して何の時ぞ、何の處ぞ、何事も凡夫の計ふべき事にはあらず、只々御佛の御力に任せて御佛の御心の貴氏の胸中に宿らせ玉はむ事のみ只管念し奉候。

御來書によれば、貴氏は佐々木喜氏より親しく御教を蒙り玉ふ由、且つ昨年眞宗寺、正得寺殿等に於て親しく御話申上候段宿世の因縁只事ならずと存候。回顧致候へは既に一年の昔と相成候。昨年太田村等へ参り候は丁度今月今日歟と存し申候。かの時は大に皆々様が御熱心に御聞取被成下候由にて、佐々木氏より懇なる申込にて本年は八月十八日より一週間ワザ／＼太田村に参り、貴氏之御郷里に於て佛知を申述候事に相成申候。夫につきても益々貴氏之昨今如何に御暮し被成候か、大に心に掛り申候。本年は貴地方に於て御話申候は「嘆異鈔」に候。定めて御存知とは存候得共先づ第一に貴氏が此法雨に浴せらるゝ様此に其一部を封じ込め申候。此書は親戀聖人の信仰の塊に候。之を味へば味ふ程言ふべからざる醍醐の味を頂き申候。御讀みよき様に最も肝要なる處に朱點を施し申候間、戦後野陣の間にも御拜讀被成下候へば必ず力強き御言は一際大なる力を御身に與へ候事と確信仕り候。

御來書によれば、昨年利劍即是彌陀名號の御言を拜書して差上候處、今こそは無上の味を御頂き被下候由此上なく喜入申候。差上候嘆異鈔の第七章(八枚目)の一章御熱讀被下度候。四行文字百字に足らざるも其意味の深長にして力の強さと金剛力の如くに候。念佛者は無碍の一道なりとはいかにも難有御事に候はずや。華嚴經の中に文殊の法は唯一のみ、法王の法は一道のみ十方無碍人一道より生死を出て玉へり」と云へり。諸君の御心には唯何事もなく四海を照し玉ふ我 天皇陛下の御稜威のみありて四千萬の國民も幾百萬の軍人も此日露の大勝利を來す次第に候。是は現世の事に候。今一步進みて未來生死の大問題に至りては、十方之諸佛、三世の如來、只唯一の無碍の一道によりて解決し玉へり。天に二日なく、地に二王なき如く、唯信し奉るは本地法王の阿彌陀佛の御救ひあるのみに御座候。文殊の徳は唯智慧の利劍のみに候。今やアヲエル如來の御力は南無阿彌陀佛六字の利劍の中にあり、朝に之を唱へて敵を拂ひ、夕に之を稱して寒月に眠る、如何なる障も之を拂ふべく、如何なる石も之を貫くべし。家康は陣中十萬の念佛を稱へしとかや、唯不思議と信し奉りて何事も御佛の御思召に任せ奉り、生ずれば極樂の寶國なり、死すれば永劫の樂果也。唯南無阿彌陀佛の不可思議に任せて稱名念佛し玉ふべし。心に頂き、口に唱へは無量の功德は身心に満ち玉ふべし。和讃に曰く。

一切の功德にすぐれたる。 南無阿彌陀佛をとらふれば。
三世の重障皆ながら。 必ず轉じて輕微なり。

南無阿彌陀佛を唱ふれば。 觀音勢至もろともに。
恒沙塵數の菩薩と。 影の如くに身に沿へり。

嗚呼此の如き諸の佛、菩薩の護あり。親戀聖人は信心の利益を擧ぐるに第一に冥衆護持の益を擧げ玉ふ。我唱へて護を請ふにあらず、唯何事も佛に任せ廣大の御慈悲を仰き奉りて、歡喜の爲に口に溢るゝ念佛は一聲一佛、一念一菩薩にて候べし、否千萬億の佛菩薩は百重千重圍繞して護らせ玉ふべし。觀音經に曰く。怖思軍陣の中に於てよく無畏を施し玉ふとの御事あり。利刀首に臨むも何かあらむ。砲丸胸に向ふも何かあらむ。口にも心にも只無碍の一道南無阿彌陀佛の在せば也。

御來書に曰く。如何せん余の最大なる罪惡の塊たる之を掃蕩するあたはず、否之をして一分時たも忘却する能はず、唯々萬尋暗黒城裡に鎖され、三毒之大敵に刺撃せられ居申候。と如何にも御尤の御事に候。かくも貴氏が自己の罪惡を御感じなされし事決して唯事には無之候。暗洞の魚は光明を知らず、暗黒の暗黒たるを自覺するに到りしは既に一縷の光明頭上を照せばな

り。自己の顔に汚あるを知るは汚なき鏡に對すればなり。吾人は此汚を知らむとするにあらざ、彼光明を仰ぎ奉るべき也。キケは軍中雜誌を送る能はざる由なれば此に求道第六號社説丈切抜きて封じ込め申候。能々熟讀し玉はるべし。貴氏は自己心中の明鏡を拂拭して一點の塵埃を止めざらしめむと企て玉ふにあらざや。蓋し是れ不可能の事也。貴氏は内に懐ける虚假を滅して賢善精進の人たらむと企つるものにあらざや。本來罪惡の一塊肉、内心までも闇黒炭塊なる吾人、如何に之を磨するも、如何に之を研くも自ら光明の生し來る筈なし、貴氏は之を嘆かるゝにあらざや。嘆異鈔に曰く。(二三頁)凡そ惡業煩惱を斷じつくしてのち、本願を信ぜんのみを、願にほこるおもひもなくてよかるべきに煩惱を斷じなばすなはち佛也。佛の爲には五劫思惟の願、その詮なくやましません。吾人何ぞ八萬四千の魔軍の來襲を恐れむ。佛に八萬四千の光明在せば也。飽まで心光攝護の御慈懷に安んじ玉ふべし。

又御來書に曰く。偶々佛陀の閃光に接するも極めて微かなる如き感を得るも忽ち萬尋の苦悶交々襲ひ來りて如何とも主觀的に御佛の慈光に包まるゝか如き感無之、不安の思をなし候。實に申すも耻かしき至極に御座候。と。イカにも晝夜切實の御佛の御光を仰ぎ至る様の御懷かしき御事に候、かく平素人に法を説き御話を申候私トテも決して〳〵日夜歡喜のみの日暮を致し候譯にては無之、眞摯なる懺悔を承り却て申上様も無之候。併し主觀的に常に左様に思はれずとも客觀的にタシカに御佛の抱き玉ふ事さへタシカナレバ決して〳〵不安の念を懐くべきには無之候。蓮如上人御一代聞書に或人雲居寺の如來に攝取不捨の事を知らせ玉へと祈り玉ひしに夢に如來其人の袖を捕へてはなし玉はず、ニゲンとすれどニガシ玉はざりし其事を上人に申上しに、攝取不捨と云ふはニグルものをにがし玉はぬ事なりと仰せられ候由。如何に御身は不安也。墮獄也。と呼び玉ふとも御佛は落し玉はず、はなし玉ふ事なし。人間は一代の間苦惱の爲めに苦めらるゝもの也。苟も肉昧ある以上は人世は肉と靈との戰也。苦悶は決して絶ゆることなし。サレド其苦悶中微かなりとも光明のあらはるゝ豈廣大の救にあらざや。譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無間。雲あると雲なきとは日光の照護を妨ぐるものならむや。聖人既に唯圓房に對しての玉はく(嘆異鈔九頁)親慈も此不審ありつるに唯圓房同じ心にてありけり、よく〳〵案じみれば天に踊り地に躍る程に喜ぶべき事を喜ばぬにていよ

〳〵往生は一定とおもひ玉ふべき也。よろこぶべきことをあさへてよろこばざるは煩惱の所爲也。しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が爲なりけりとしられて、いよ〳〵たのもしく覺ゆるなりと。嗚呼聖人の御宗旨には我々に向ては人情に遠き一點無理なる處なく候。かく承れば喜ばれざる爲に不安の念に住するにあらず、かく煩惱多きものを救ひ玉ふ事と却て喜ばるゝ次第に候。猶又かく彌陀名號の利劍を帯び、心光照護の慈懷に抱かれ、煩悶慰籍の德音に接し玉ふをも軍中時として死を恐れ玉ふことも、故郷を慕ひ玉ふ事もあるべし。是人情也。人間たる已上は最の事と存候。聖人の曰く。又淨土へインギ参りたき心のなくて聊か所勞の事もあれば死なんざるやらむと心細く覺ゆることも煩惱の所爲也。久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候事、まことによく〳〵煩惱の興盛に候ころ、なごりおしく思へども娑婆の縁つきて力なくして終るとき彼土へは参るべき也。いそぎ参りたき心のなきものを殊に憐み玉ふなり。これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ、と。ヨクキ、玉へ、宗教の最終の理想は肉の生活を終りて靈の生活に入れる時にあり。此世にて光明に包まれて來世親しく光明中の寂靜無爲の生活に入るに在り。私も本年三月親に別れて初めて極樂の東門開けて我父の迎へ入れられむの時、如何に淨土の莊嚴の麗はしきかを仰ぎ奉るを得たり。凡夫の御互慕はしき心も、心細き心のあるも決して無理にはあらざ。サレド是久遠劫よりの習氣のみ、煩惱の繫縛のみ。吾人五十年の人生イヅレハ出立せざるべからず、吾人は肉の穢身をすて、清淨の佛身を得、苦惱の聲を聞かずして安養の聲のみをきく時は、如何に楽しく候はん。早さか、遅さか、人間は此境に達して初めて彌陀救済の極を見る。貴氏凱旋の日子を執りて佛恩を喜ぶか、淨土の彼岸に於て相見えて喜ぶか、何れ永劫共に樂むこと一點の疑あるべきにあらず、只一點吾人の計ひを挿むべからず、只々大命をかしこみて、國の爲、民の爲、大君の爲、乃至一切衆生の爲に稱念佛の利劍を帯びて猛進し玉へかし、只々再會の時を期し奉る。何事も如來の御計ひに任せ奉るの外無之候。

八月三日

太田文次様

東京にて 近角 常観

二仲、同時に差上候嘆異鈔といへるは親鸞聖人の信仰の眞髓を寫したる聖教に候。「信仰問題」中に嘆異鈔の第二章につきて所感を披瀝致し置き候間、彼此照し合せて御覽被下度候。此書は一往見ては御了解如何と存候へども、漸々味の深くなる書に候。「求道」第六號社説の信仰と戒律といへる文章は其解題と見做すべきものに候。嘆異鈔の急所を示したるものに候。又嘆異鈔及信仰之餘瀝二冊つゝ差上候間、一通り艦中志ある人々に御覽願上候。早々

三

恭啓時下暑氣相催候處御筆視愈々御清勝之段奉賀候。扱過日聊の湘志を捧呈仕候處、御丁寧なる謝狀に預り恐縮汗顔之至に奉存候。且又貴著信仰之餘瀝御惠贈被下御厚情難有奉感佩候、小生義未だ拜眉の榮を得ずと雖、大名を傳承する茲に久しく、政教時報發刊以來其紙上に於て親しく高教を蒙り、心中の無明を感せむとする一個の可憐煩悶子に候。然るに先生の懇切なる落陶に依り、漸々慈光に浴するを得しは深く感鳴に堪えざる次第に候。

如仰今回如來の六命は小生をして軍馬嘶き劍光輝く兵員の一名となさしめ申候。小生の眼中には最早郷家なく、兩親なく、兄弟なく、名譽なく、又利慾も無之、唯如來の一命令あるのみに候。されば此大命の下に國家と血族、勳功と耻辱、幸福と災禍、生還と死生を一任致候故、心身の輕きを覺え、怠慢なる小生も聊か活力を加えたるが如き感あるは、偏に大悲慈光の照護まします故と雖有存候。

貴著信仰之餘瀝は第一版發行の當時既に一冊を購求して修養上の良師と仰ふが居りしが、一昨年御地在遊の一友より信仰界第一書と題して送られし一部の書は豈計らむや右貴著なりし故、友の信心深きに嘆喜すると共に、同書の版を新にして再び小生の手に入りしは、これ偏に如來の化導と報謝の念油然而として起りしが、今や又先生より直接御惠賜を辱うせんとは夢にも知らざる處、實に不可思議の感に打たれ申候。

洗手拂座、謹て拜讀すれば先生讀經餘瀝中に御示の御言葉の如く、小生現在の境遇と周圍の事情は前讀二冊の未だ曾て與へざりし偉大なる教化を惠まれ申候、之を思ふに彼の善導大師が道綽禪師より觀經を授けられしよりも深き因縁の貴著に存するならんと感申候。此有縁の聖書縱令吾身はシベリアの露と消ゆるまで背瀝中に格納致度考に候。

先は不取敢御禮勞々愚陳仕候、目下流行病所々に相見え候間、朝家の爲め、國民の爲め折角御自重之程奉祈候。早々敬具。

七月十四日

近角 常観

弘前にて 生 玉 慈 照

拜啓仕候。貴書拜見仕候てより既に一ヶ月に垂んとする次第に候。一度御返事差上度存居候へ共、尙御出征なき事と存じ、ツイ多忙に取紛れ、唯今は花巻附近大澤に於ける夏季修養會に參り、嘆異鈔を拜讀し、日夜佛陀の慈愛を仰き居申候。然るに昨今〇〇〇〇地方より而も輻重側の〇〇〇〇にて皆々停車場へ見送りの爲め出掛けられ候に付、定めて貴氏も愈御出征相成候事と心中深く相感じ申候。未だ拜眉の榮を得ず候へとも、御尊書によりて既に六年前政教時報初刊の際より、宗教的同朋として御知合を得たりし事を拜承仕り、何となく舊知己の如き感に堪え不申候。隨て此度御出征と聞き一層懐かしく存じ上げ候。併御尊書の上に了々分明に如來を信じ玉ふの深くして、且つ堅きこと相顯はれ候へは、毫も御心配は不申上、寧ろ是より益々實際問題によりて信念の修養を深めらるゝ事と確信仕候。此上は不肖より特に申上げて御慰め申す必要すらも無之事と存候。されど先日來一度申上度存じ居候事有之候間、茲に御披瀝申上候。勿論緊急に申上ぐべき必要も無之次第に御座候間、或は雜誌上にて何處かにて御覽被下候事に相成候哉も難計候。若し御覽之節は葉書にて宜敷候間一寸御知らせ被下候は、微志相届き候事と喜び可申候。

貴氏が信仰之餘瀝をかく迄御愛讀被成下候事は實に言ふべからざる感謝を以て佛前に感泣する所に候。既に當地に參り候ても矢張同書愛讀の信友に御目に掛り不可思議の感に堪へざる次第に候。偏へは是如來の御引合せによりて結ひ付けられたる御同朋と存じ上げ申候。不肖が尊書を拜誦して一種森嚴なる靈感を得たるは、善導大師が道綽禪師より觀經を授けられしよりも深き因縁の存するならむとの御一言に候。

此御一言によりて不肖は言ふべからざる難有事に氣附き申候。他にあらず、一言にして之を曰へば「觀經は實驗的宗教の起源也」との事に候。是或は從來の言を以て曰へば機の眞實を顯はすと云ふと同一の意義たるかも知るべからず候。されど此の如く感じたる事によりては不肖は無量の靈感を引きし申候。全体實驗によらざれば宗教として生命なしとは不肖の持論に御座候事は御存知被下候事と存じ候。大經には佛陀の慈悲と力とを正面より直説せらるゝも、實驗として説きたるにあらず。然るに觀經は實驗的事實を説きたるものに候。かく申せば嗚々反覆致すべき必要は無之候へども、爲念に一言申せば、即ち觀經の

正面にあらはれたる韋提夫人が幽閉中にありて大苦悶に陥り、遙かに佛に請ひ奉り、佛は之を慰藉する爲に王宮に現し玉ふ。實に王舎城中の悲劇、釋尊の來現、蓋し宗教的舞臺として此の如く切實なるは古今其比を見ずと言ふも過言にあらざるべしと信じ申候。殊に韋提夫人「五昧を地に投じて求哀懺悔し、光臺現國、即便微笑、遂に佛韋提希に告げ玉はく、汝今知れるや否や、阿彌陀佛此を去る遠からず」と言ふに至りては壯嚴と大悲とを描き出して其極に達せるもの。宜なる哉、親鸞聖人常に觀經を見るに常に此逆惡の悲劇と韋提の救濟とを主とし玉ふこと。且つ觀經の裏面を描きたるものは、大槃涅槃經にして、即ち阿闍世王の大苦悶、大安心の事實に候。是嘗て草したる信仰論に盡くせるものにして現に「信仰問題」に於ける一章と致置候。是親鸞聖人が自ら信卷の終りに引用したる文字にして、不肖は常に以爲らく、此の如き文字に注意するの人は此の如き境遇に處したるの人たらざるべからず。故に恐くは親鸞聖人は自ら苦悶中に經驗せられたるものなるべしと存候。即彼の有名な「愚禿釋戀愛欲の廣海に沈溺し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを樂まず、愧づべし、傷むべし」なる懺悔の次に直ちに涅槃經阿闍世王の文を引用して、恰も自己の實驗告白に代へられたるかの如き感を生じ居り申候。己上の事は從來文章に講話に屢申したる事なるも是觀經の實驗の中心に候へは重ねて此に叙し申候。

已上觀經の實驗的宗教の起源たることだけは、今更氣附きたるにはあらざるも、此度氣附きたる主なることは此の如く觀經は實驗的經卷なるが故に、古聖賢が信仰に入るとき大經より入らずして寧ろ觀經より入れるといふ大事實に候。第一に曇鸞和尚が初めて菩提流支より授かりたるものは實に觀經に候はずや。私は未だ十分取調は致さず候へども、曇鸞求道の動機なるものが實に實際問題に候。即ち曇鸞和尚が講說中に一種の氣鬱症に罹られしもの、如く感せられ候。夫故彼の陶隱居につきて長生不死の神方を得んと企てられしものなるべしと存候。然るに歸路菩提流支より觀經を授かり、定めて反覆熟讀せられしなるべく、一日汾州門外虚空を眺めてある時、三十三天のあらはるゝを見て、忽ち氣鬱を散せしと云へること傳中にありしことを記憶致候。タシカニ曇鸞和尚は偉大なる實驗的信仰たることは申すに及はず、親鸞聖人は之に私淑して其名を天親曇鸞に取りしが如き、特に廣文類の如き本願力によりて二種の回向を説き玉ふ、全く曇鸞の精神を傳へ玉ふことは明らかに候。此の如く親

鸞聖人の信仰は曇鸞和尚の信仰と心琴共鳴する所以のものは、其根本佛陀の慈悲を實驗せられし味が彼此相照するものあるによる事と確信仕候。次に道綽禪師は此曇鸞の碑文をよみて實驗の味を傳へ、貴書の如く善導は道綽より亦觀經を授かり、一生熟讀、事々に之を實驗して所謂生ける佛陀の信仰を披瀝して觀經義を製作し、法然聖人は黒谷報恩藏に於て一代經五遍閱覽の後一大煩悶の中に暗中に搜り得たるもの實に善導の觀經義にして、其中に於ける一心專念彌陀名號行住座臥不問時節久近。念々不捨者是名正定之業、順彼佛願、故の文字に着眼し玉ひしとかや。想像し奉るだに心の涼しさを覺え申候。之を要するに古來の聖賢淨土の法門に入るに、大經小經によりて入りしもの少くして、却て常に觀經を導火線として信念の猛火を呼び來ること實に不可思議に候。是觀經其物が實驗的信仰の起源に候へは期せずして此の如く自然に古今其規を一にすること、存じ候。勿論歴史的に考へなば、支那にて觀經は大に流行したりし經典たりしに由るべけれど、益々かく衆人に愛讀せられし所以のものは、觀佛念佛の實驗を描けるによること、存じ候。親鸞聖人に至りては寧ろ王舎城裏に於ける人生の悲劇と、韋提阿闍世の大信仰とが着眼の點たりしもの、如くに候。之に依りて觀經和讃の如き此悲劇的事實を描くを主とし、廣文類總序にも劈頭直ちに「しかればすなはち淨邦縁熟して調達闍世をして逆害を興せしむ、淨業機あらはれて、釋迦韋提をして安養を還はしめ玉へり。是すなはち權化の仁齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲、まさしく逆謗闍提を惠まむを欲す」と喝破し玉ひたる所以のもの實に身に泌みて嬉しく存候。不肖の如き苦惱の實驗を経て信仰に入りたるものは此事實の上に無上の法味を感じ候。信卷闍王獲信の事實を叙して本願醍醐の妙藥と嘆美せられし味は、味ひ盡しかたきもの有之候。不肖の實驗に同情して信仰の餘瀝を味ひ下され、又現時の御境遇上再び讀經餘瀝に偉大なる光明を仰き下されし貴氏は、猶一層已上の所説に御隨喜御同歡下され候事と確信仕候。貴氏が此書を御覽下さるゝ處は果して何れか、西比利亞の野に秣ひ玉ふ朝か、塞外秋高くして霜月野營を照すの夜か、定めて言ふべからざる御感慨なるべしと御同情の涙に堪へざると共に、又我々内地に放恣なる日暮しをなしたるもの、到底想像し能はざる、佛陀慈光の味を此觀經の境遇と照し合せて、御味ひなされ候事と又羨ましく奉存候。甚だ長く相成り、殊に陣中にて御覽下さるゝには稍閑文字たるかの感ありて恐入り候へども。有昧を告白するに現時不肖は

觀經の意味大に了解する所ありて、言ふべからざる歡喜に候へば何もかも可申候。昨今當講習會出席の一人なる某氏の實驗談に候。此人は非常に人生の苦痛を嘗められし由にて、危篤の病氣に罹かりて死に瀕し、且人生不如意の事襲ひ來りて暗黒の世界を辿りつゝありし由に候。其病中人ありて淨土三部經を借し呉れ候故、讀むとはなしに時々拜讀せし由に候。併し大觀二經はあまり讀まず小經のみ熟讀せし由に候。死に瀕せし時は、唯、譯なしに稱名念佛して過ぎたる由なるが、夫も自らも深き考も有せず、意味をも感ぜず過ぎしが、唯世の中には我々の知り得べからざる御力のある様、馳げに感じつゝありし然るに親戚に不幸ありて一夜之に會葬し、何んとなく觀經を拜誦して、眞身觀(其人は勿論如何なる個所たりしかを記憶せざる位也)に至りて説是語時、無量壽佛、住立空中觀世音大勢至、是二大士侍立左右云云と讀まむともなく、讀まぬともなく、忽爾として心中確かに了々分明に空中に佛陀の示現し玉ふ御影を拜し奉り、其光明、其威神、トテモ言ふべくもあらず、不可思議の感に打たれて、爾來佛陀の力の偉大なるを深信し、廣大の慈悲に感泣する様になられ候由に候。不肖は此感話をさ、て心中無限の感に打たれ申候。私は彼人が心眼分明に拜し奉りし佛陀は決して疑ひ申さず候。されど其御姿が信仰としての要點にては無之、之によりて遂に信仰に導かれし便りに相成候次第に候。熟々之を思ふて其御手回はしの大なるを佛智海の不可思議に感じ申候。是によりて不肖初めて眞身觀に於ける住立空中の御影は、心眼に映せし化佛としてはタシカニ方便引入の御影にして、信仰の上に感ぜられし佛陀の慈悲は、是深信の精髓なりと存候。之によりて不肖初めて觀經の上に於ける隱顯の二義あることを實驗上より尤の事なりと信ずる様に相成申候。由是觀之、十三觀の觀法も三福九品の實行も皆畢竟佛陀の慈悲に感泣するに至らしむる手段たるべし。彼人が平素佛を信ぜざるにも拘はらず、三部經を拜誦し、殊に死に瀕して、何事とも知らず念佛しつゝありしごとき、實に下品下生の有様を眼に見る心地に御座候。然れとも遂に佛陀の慈悲に感泣するに至らば同一念佛にして別の道なく、三三九品の區別を沒了して絶対佛陀の大智慧海に廻入せしめらるゝこと明らかに候。蓋し定善とか散善とか言へば何か特別の事柄の様なるも畢竟現今にても信仰問題に傾心する青年によくある事實に候。即ち徒らに諸種の冥想に耽りて如來を觀し、淨土を觀するが如きは即ち是れ定善の人にして、又諸種の道德を追ひて戒律的實驗の爲めに苦悶する人

の如きは確かに散善の人と可申と存候。若し爲さざるべからずとの見地より爲す善ならば父母孝養も不可なり。念佛を勵むも不可なり。苟も我爲さざるべからずと云へる見地に住して爲すことは、皆自力の善にして虚假の行と謂つべし。嘆異鈔に親鸞は父母孝養の爲に念佛一遍にても申したること候はずとはたしかに此意義を直言せられたるものなるべしと存候。予は斷言す。我孝養を爲さざるべからず、我孝養を爲しつゝありといへるが如き孝養ならば偽善也。此の如き冥想の定善、此の如き道德の散善之を勵み之を勉むるに益々之を全ふするの難きを覺悟して、唯々佛陀の慈光に感泣して實に念佛憶念の境に達し、光明攝取の利益によりてこそ、人中の妙好華となり、觀音勢至の勝友たるの人たるを得べけれ。之を要するに觀經の顯說にあらはれたる冥想と道德は、畢竟其後に隠れたる佛陀偉大の光明を仰がしめむとする方便に外ならざる事と、いかにもと相感じ申候。たとへば日本古畫の表面には色々の畫を描けるも、其裏面には一面の金箔あるが如く、觀經の表面は幾多定散の善を以て飾らるゝも、裏面は平等一味の佛陀の慈光あるのみに候。其慈光は畫帛を通して金箔の光りを洩らし來りたる所、眞身觀といひ、光明攝取と云ひ、言ふべからざる味を感じ申候。

若し一たび此の如き冥想と力行とをすて、絶対の光明に接觸し來れば、胸中溢るゝものは感謝あるのみ。此に於てや、感謝の情よりして父母の孝養もなすべく、師長にも奉事すべし。是れ前者の我父母を孝養せむと云へる力味心を有するが如きものにあらず。父母を通して佛陀の慈悲を拜し、感極まりて、せめては報謝の微衷より油然而として流れ出づるもの、是れ眞意義に於ける父母孝養なり。吾人が國家に對する觀念、陛下に對して奉公するが如き皆此感謝の念より來るもの。親鸞聖人が「朝家の御爲め、國民の爲め、御念佛候べし」とあるが如きは、此信念より迸り出てたる叫と存候。貴氏現時の御境遇上定めて適切に御感じ遊ばされ候御事と存じ奉り候。此の如く信念の一つより百般の道德も自ら爲さむと企てずして、唯感謝の動機より出來得べきベストを行ひ、又淨土を欣求するの餘、冥想靜觀苦樂を味ふ亦何の妨かあるべき。嘗て懈慢として退けられし冥想も、苦痛の種として身を桎梏せし力行も、一旦悉く擲ち去りしも、今や信仰已後の樂として、信仰已後の活動として感謝の一念より復活し來る豈快ならずや。是實に觀經に於ける隱彰顯密の意義なるべしと確信致候。有軀の處、從來は此般の點に注意

せざりしが、何等の因縁かよく感得するに至り申候。蓋し從來教行信證眞佛土の點につきて實驗すること多かりしが、此夏は化身土を實驗し得るの時機到來せしものと、坐ろに佛天の冥運に感泣仕居候。

已上の事、一寸みれば頗るコツケの様相見え候へども、實驗の心覚えあらせらるゝ貴氏にとりては、能く御了解下され候事と信じ申候。且つ不肖が觀經一部につきて此の如く感じ來りたることは、直ちに一代佛教上に於て同一の見解を以て其精髓を攫取し得へしと存候。觀經は是れ一代佛教中に於ける廣大なる靜觀及び無量の實行の標本にして、之に對する見解を以て模範として一代佛教を律せば、何れの經典か之に洩るゝことのあるべき。不肖從來釋尊及佛弟子の實驗を味ふにタシカニ吾人の實驗と相照すものあるにも拘はらず、教理としては遠く相離れ、又華嚴の善財童子、法華の長者窮子、涅槃の法身常住等何れも吾人の信念に響くもの、たしかに存するを自ら覺ゆ。其經典を見れば所謂聖道の諸教なるもの、其邊の所、何とも言ふべからざるもの存せしが、今や確かに之を了解せり。曰く、若し各其表面に説く所の元始佛教は人間の釋尊なり。華嚴は佛陀自悟界なり。法華は二乘開會なり。涅槃は法身常住なり。されど一たび其裏面に入りて其眞相に徹底し來らむか、元始佛教も、華嚴も、法華も、涅槃も裏面に偉大なる佛陀の絶對の光明のみ。前後を通じて何れの經典にも、必ずや此偉大なる光明の溢るゝを見む。若し現時の語を用るなば、此光明は含有的に何れの所にも存するを知らむ。聖道八萬四千の法門の裏面は直ちに是れ彌陀佛の一門のみ。蓋し親鸞聖人は此見地に住せるが故に、廣文類に於て諸經を引用するに毫も究屈を感ずることなし。涅槃の實諦を以て彌陀の眞實とし、華嚴の信力を以て彌陀の信仰とし、遂に無傳の一道を以て念佛の一道なりとす。頗るコツケに似たるも決して然らず。佛陀の眞面目を以て彌陀なりとする見解なるが故に、諸經論中の要點を拉し來りて悉く一佛陀中に融和し來り之を稱して彌陀とするの信仰なり。故に八萬四千の一代佛教は釋迦佛の所説とせば、其自悟の境界を顯説し來るは所謂聖道門なり。若し其釋迦夫自身の眞面目は絶對の彌陀夫自身なることを喝破するに至りては、八萬四千の區別を沒了して其裏面唯一彌陀の力あるのみ。而して釋尊獨り然るのみならず、諸佛皆畢竟彌陀の力なるのみ。此に於てや、釋尊即ち彌陀、諸佛即ち彌陀にして唯彌陀一佛あるのみに候。是特に阿彌陀經によく顯はれてある十方諸佛同讚の意義に候。此に於てや阿彌陀經

の特徴は亦自然に明瞭と相成可申候。

已上は現時觀經の實驗を味ひて得たる妙味に候。蓋し尊書に觀經云々の御言は確かに之を感ずるの因縁と相成り申候間、思想として未だ纏らず候へども、靈感の儘披瀝致候。大經に對する讀經餘瀝を御味ひ下され候貴氏は、現今の境遇猶一層實驗的宗教の起原たる觀經に趣味を御見出しなさるべくと存じ、第二の讀經餘瀝とも稱すべきものを御告げ申候。蓋し貴氏の眼中一切を抛ち去りて唯佛陀の慈愛に一任して心身の輕さを感じられ、却て一切の活力を加へられたる貴氏には、必ずや一層偉大なる靈感を蒙らるゝことならむと存候。唯何事も如來の御計ひに任せ奉りて、他口必ず相見え候折をのみ樂み奉り候。貴氏の御身体は既に如來に捧げられ候已上はモハヤ御自身の物に非ず、一層御自愛肝要と奉存候。頓首。

八月十二日

陸中國大澤夏期講習會ニテ

近角 常觀

生玉 慈照 様



他力的奮勵主義 (二)

藤井 專 隨

予は前號に於て、修養問題に對する現代青年の態度を自然主義と奮勵主義との二種に分ち、前者を排して後者を取り、轉して信仰問題に入りて、宗教的生活に自力的自然主義、自力的奮勵主義、他力的自然主義、他力的奮勵主義の四種ありとし、前三者を排して最後の一を取り、現代青年の生活主義として、他力的奮勵主義の、最高尙にして最適當なるものなることを説破して筆を擱せり。要之、已上は他力的奮勵主義を理論的方面より稱道せしものなり。予は是れより進んで實際的方面より他力的奮勵主義の面目を描き出さんと欲す。

夫れ佛陀の存在は、吾人果して理論的に之れを證明することを得べきや否やは、寧ろ吾人の問題にあらず。理論的證明は如何に巧みに爲し得たりとするも、更に實驗に由りて直に之れを自己身上に感じ來るにあらずんば、單なる理論的證明は宗教的意識とは殆ど没交渉のものなり。實驗の伴はざる理論的證明は、單純なる一種の智的満足は則ち之れあるべきも、何等吾人の心情を動かすべき能力あるものにあらず。信仰とは經濟の概念を構成することにあらず。佛陀の力を身に感ずることとなり。佛陀慈愛の手に觸るることとなり。然らば如何にして之れを感ずべき乎。如何にして之れに觸るべき乎。これ寔に吾人刻下の問題なり。

吾人宗教的經驗の出立點は、善き人の仰せを蒙りて信する。

に在り。是れ實に吾人宗教的經驗の出立點にして又到達點なり。吾人は是れ以上に闖入して探求を進むることを徒勞なりとは言はざれども、吾人は其の必要を感ぜざるなり。先づ善き人の仰せの眞不眞を稽査し、其の眞なるを確め得て而る後吾れ之れを信せんと欲すといふが如きは、研究者の態度としては、吾人之れを諒せざるにあらず、然れども求道者の態度としては吾人絶對的に其の無意味を警告せんと欲す。豈にたゞ然るのみならんや、吾人の見地によれば科學研究の出立點と雖ども亦一個の信仰なき能はず。ニートンが重力發見の出立點は、彼の眼前に落下せし林檎の「地球に引力あり」といへる無言の福音に對する信仰にあらず。只彼は廣く客觀界の事實に照して、間接に之れを證明し、吾人は自己の心身に於て直接に之れを實驗感得するの差あるのみ。要之、吾人は吾人宗教的經驗の出立點は之れを前聖先覺の德音を信するといふ點に置かざるべからざるを斷言するものなり。蓋し彼の有名な龍樹の佛法之大海、以信爲能入といへる文の如きも亦此間の消息を道破されたるものと謂ふべし。但此處に人あり、國を棄て財を棄て、名を捨て身を捨て、一意専心獨力以て自家安立の地を探求せんと欲するあらむか、吾人は此の如き人に對しても猶ほ前聖先覺の德音を奉せざるべからずと強ゆるの必要を認めず、然れども此の如きは愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑しつゝある、凡愚底下の吾人に在りて果して眞に企及せらるべきところなる乎。若し苟も然らずとせば吾人の出立點を「善き人の仰せを蒙りて信する」といふ點に止むることは、寔に吾人至當の處置にあらずや、吾人はたゞ

之れを花晨月夕、熊時接物の間に於て、其の仰せの眞意義を味ひ來れば則ち足れり。吾人の所謂他力的奮勵主義の生命、亦實に此處に存す。

然らば其の所謂「善き人の仰せ」とは何をや、他なし、佛陀救濟の德音是れなり。吾人の善き人は吾人に教へて曰はく、佛陀は無限の慈悲と、無限の力とを有し給ひ、以て吾人に永久の安慰と、不斷の奨勵とを與へ給ふ。世を擧げて吾れを欺くとき、唯一人欺き給はざるは佛陀なり。世を擧げて吾れを棄るとき、唯獨り棄て給はざるは佛陀なり。吾れ得意の境に入り、世を擧げて嫉妬の目を以て吾れを見るとき、唯獨り吾れを警戒し、吾れに同情し給ふは佛陀なり。吾れ失意の境に入り、世を擧げて嘲笑以て吾れを遇るとき、唯獨り吾れを慰辭し、我れを蘇活せしめ給ふは佛陀なり。我れと共に悲み我れと共に笑ひ、得意の友となり、失意の友となり、徹上徹下、無私の同情、無垢の慈愛を湛へて、我れと共に行き、我れと共に止まり、我れを護り我れを導き、我れを戒しめ我れを慰め、我れを勞はり我れを勵まし給ふは是れ佛陀なりと。當さに知るべし佛陀は、其の救濟の手を以て、常に吾人を捕獲せんと力め給へることを、當さに知るべし佛陀は弘誓の慈光を以て、常に吾人を開發せんと力め給へることを。

十方の如來は衆生を、一子の如く憐念す。子の母をよもふが如くにて、衆生佛を憶すれば、現前當來とをからず。

如來を拜見うたがはず。吾人一度此の如き善き人の仰せを蒙り、清淨の信眼此處に開けて、如來矜哀の慈光を拜し、大悲救濟の御手に觸る、時悲みの涙は喜の涙となり、憂の谷は樂の園となり、不遇の愁訴は恩寵の感謝となり、内界の情調、外界の光景、頓に色彩を一變して、また得意の誇るべきなく、失意の喞つべきなきを得意といひ失意と云ふ、兩つながら佛陀慈愛の賜なり。心を潛そめて佛陀が之れに由りて吾人に與へ給ふ深大痛切の訓誡を味ひ來らむ乎。無限の恩籍は此處に見出され、無限の奨勵は此處に發見され、無限の慰辭は此處に於てか吾人の全身に感ぜられ、魂飛び肉動いて、奮勵せざらんと欲するも能はざるなり、精勵せざらんと欲するも能はざるなり。砲烟彈雨何かあらむ、逆境失敗何かあらむ。たゞ佛陀の引導に順ひ、たゞ佛陀の鼓舞に任せて、精勵奮勵すべきあるのみ、一舉一動佛陀の照覽、語嘿進退佛行にあらざるなし。

吾人は此の見地に立つにあらずんば、到底宇宙人生の意義を領解すること能はざるものなり。若し人生より佛陀の慈愛を除き去らんか、人生は欄檻化石の雜居のみ、何の處にか生色あらむや。若し宇宙より佛陀の靈力を除き去らんか、宇宙は枯木死灰の堆積のみ、何の處にか活動あらんや。宇宙は佛陀の慈愛に由りて初めて生動し來る。意味着けられ、宇宙は佛陀の靈力に由りて初めて生命なり。此の慈愛を生命と動かし、此の靈力を實力と動く、寔に是れ如く動く、寔に是れ如く動く。

分明の事實なり、復た河の處にか、佛陀の存在を疑ふの餘地あらんや、此の慈愛に由り、此の靈力に由り、慰められ、奨められ、永久に精進奮勵して止まざるもの、是れ吾人の所謂他力的奮勵主義の生活なり。

他力的奮勵主義の稱道は決して新奇なるものにあらず、釋尊已に大無量壽經に於て他力的奮勵主義の模範的生活を示し給へり。其文に曰はく。

もろくの衆生に於て、大慈悲饒益の心を得たり。柔軟調伏にして、忿恨の心なく。離蓋清淨にして、厭意の心なし。

嫉心を摧滅せり、勝れるをそねまざるが故に。専ら法を樂求して、心に厭足なし。常に廣説を欲ひて、志疲倦なし。法鼓をたゞき、法幢を建て、慧日を曜かし、痴闇を除く。六和敬を修し、常に法施を行す。志勇精進にして、心退弱せず。世の燈明となりて、最勝の福田なり。常に導師と爲りて、等しく憐愛なし。唯正道を樂ひて餘の欣戚なし。諸の欲刺を抜きて、以て群生を安すんず。功慧殊勝にして、尊敬せざることをなし。三垢の障りを滅し、諸の神通に遊ぶ。

と、洵に是れ吾人の理想的生活にして、吾人未だ遽かに此の妙境に達する能はずといへども、冀くば奮勵以て其の片影を實現せん哉。

* * * * *

日曜講話

園林遊戯の眞趣味

近角常觀氏述

本日は雨がふりまして少數の御方でありますがかへつて非常に気があちついて宗教上の感想を起すに餘程適して居ると考へます、先程から時間の來るのをまつて居りますうちに今日の講話につき種々考へて居りまして一層深く自分でも感じましたから特に今日は自分の考を深く御話し申して見やうと思ひます、これ迄書物からではなく自ら自身にも已に實驗でなければならぬ事を申して居りましていつも實に横着な御話のしやうではありますすが外の人の書かれたものをそのまゝ申すと云ふことをいたしませぬ、これは或點から見れば宗教の立派なる點を云ひちがひを申すかとの御うたがひはありませうが自分はどうも自身に感ぜないことを申しませぬまたその變つた書物も見ませぬ又必しも宗旨の如何にか、はりません極少ない書物を心を入れて深く味ひますと實に感想を深く引き起すのであります、今日もその點につきて前より考へて居つたのに非常に感想が集りました、度々お聞になつた方もあり又始めての御方は少々分りにくいかもしれませぬ御差支のない限りはこの講話のすんだあとで御尋ねになりますやう。

今日主に申しますのは求道雜誌にもせて置きましたが淨土教即ち經文としては三部經がありその外に論部として全体のすじを引くるめた淨土論と云ふ薄い一冊があるその中に五功德門の事が書いてあります、今日はその意味を御話します門は入口の意味で五門は人間が極樂へ往く五つの門である五つのはいり口である、宗教の本義は吾人人生上の低き風俗の境界ではなく實に崇高なる理想界に向つて非常なる望を以て仰き進んで往くと言ふのである、即ちこの世界に於て佛の位は非常に高き地位である、無限の時間に一時一時にその方へ進み往く或は頓に往くと云ふ、即ち清淨なる世界に往生すると云ふ思想である、今日の科學的天文學的に考へると無益な機であるが、宗教の極致は人生已上の事實としてそれを望むが淨土教の意義である、ソゝ云ふ風にして高遠なる極樂世界に往くその路を五功德門と書いてある、

第一番が近門即ち漸々佛の淨土に近づき往く私は毎年一度若しくは數度故郷へ歸る、故郷へ漸次近くと同じく其高遠清淨なる世界永久の佛陀の世界に向つて非常なる望を以て近いて往くのである、第二が大會衆門でもうその方へ往けば澤山なる人と一所になつて往くのである、一步は一步より故郷へ近いて見れば誰れ彼に道々て出逢ひそれ等の人々を互に愉快な話をしつゝ往くと同じく信仰上同じ道に入つた人々が皆佛の資格を得て兄弟手を携へ佛陀の世界を念じつゝ進み行くのである、第三は宅門とある故郷の地へ入つて見れば友人にも出逢ひあすこの川こゝの森を経て自分のうちの樹が見える門へはあり込むそれが宅門である、愈人生を出て修行安心の

宅に入るとあるもう心を靜にして安心の位置に住する、淨土論等にも極樂の様子が實に奇麗に記載してある、無量壽無量光の佛が主人として多くの菩薩その眷屬等夥多の周圍に居らるゝ、一度郷里の自分の宅へ入れば父母あり兄弟ありて旅から歸るのをまちうけて居つた處である、ソゝあるから極樂は平凡な書き様であると言ふけれども淨土論の註釋即ち論註には非常な無限の絶對界の様子がそのうらに書かれてある、丁度書のうらに金を置いて絹を通して自然に金の色があらはれて居ると同じ様である、然ればどういふ風に往生するかと云ふにその生るゝとあるが人間が生れるとはちがひ無生の生とあるが絶對界は吾人の所謂生るゝと云ふ如き事ではない、夢を見て居ると唯今醒むるのだと愈々さめた今さめたそのさまた境界はその前よりゾゝとあつてさめた時に始つたのではない、丁度淨土に往生するのがその通である生るゝにはちがひないがそこに意義がある即ち無生の生でその生るゝ世界は蓮華藏世界で廣大なる理想の絶對世界である、阿彌陀法皇初め諸の菩薩のむかへ給ふその世界に生るゝのである、故郷の家でわが親兄弟に久ぶりで出逢ふやうなものである、第四が屋門とある、それは愈々淨土に往生して淨土の樂を受ける平和沈靜安泰の境界でそこに咲ける麗はしい花愉快なる有様が法味樂とある、久ぶりでうちの坐敷へ坐り御馳走を戴く又友人より送つてくれた御馳走も味ふと云ふ様に種々の法味を戴くのでこれについても種々書いてありますすが略して置きます、第五は園林遊戯地門である、愈腹もふくれ親の處で話もし一つ庭をあるかうあたりの景色を見回すと何とも言へぬおもし

るいこれはたぐみな喩がかいてある、即ち浄土に往生して四方をふりかへつて見れば一切の人間が苦しんで居るそれを見ては直ちにその身相應の形を現じて生死の園に再び歸るのである即ち極樂よりこの生死の世界に生るゝのであるをうして神通自在に遊戯する無限の力を以て自由自在にその身をあらはし遊ぶのである、吾人の遊戯とは苦みながら遊ぶのであるが心閑に自由に散歩するときは中々愉快なものである況んや極樂世界からこの人生に生れ来て思ふ存分人生を救ふ事か出来るのである、以上始めの四つは人の門で第五は出の門である即ち第五は極樂世界よりこの人生に出る門である、これは書いてある通りお分りになるやうに申したのですがこれ丈にても實に結構な喩であると思ひます、この事は前より知つて居る文であるが近來始めてのやうに新らしく愉快になつて來たのである猶縁かへして申せばこの事につき適切に感じたのは今度私の親の死にましたにつきこの門を通して極樂の世界にはあるのであると云ふ事がこの度始めて分つたのであります、大谷派の人故笠原研壽氏は南條文雄氏と共に明治九年に英國に留學されて同十二年彼梵語學者であつた故マクシミラ一氏の許へ往かれて日夜精勵して居られたが十四年の六月頃ミクシユミラー博士とこの兩氏は佛教の經文宣譯の爲めモールウエルンの岡の閑地に寓して居られたその時共に西方の空赫奕たる日没を見て笠原氏博士の前に進みて西方を指し彼處は即ち我所謂蘇法伐提即ち安樂浄土の東門である我等の往生する門であると言はれた事があつたその後氏は肺病の爲十五年十一月日本へ歸られ翌年七月に東京大學病院でなくなられ

たその報知が博士の許へついで博士は深くこの訃音をかなしみ氏の爲めに一文を草して倫敦タイムスへ出されたその結文に笠原は豫てモールウエルン岡上で自分に言ふた事を記して居るが今思へば笠原はその極樂の東門へ入つて互に親愛せし人と俱に相會し親しく阿彌陀婆佛を拜し奉る事を信ずると云ふ風にかいてありますがその極樂の門が唯今申したその門である、私は從來信仰と言ふときに於てこの近門大會衆門宅門奥門菌林遊戯門の五門が愈々佛の世界へきつと往く正しく往くと云ふ地位を言ふたものであるとそれ迄しか思へなかつた、この度は死する事が恐るべき事ではない位でないそれが眞の理想で極樂で往生すると言ふ事が非常な意義をもつて來たのである、この世の中に於て衆生濟度するとはこれ宗教のつさみの苦悶をした人は御經驗がありませう苦んでしかんだ顔をして居る人を見てはその人に對してどうして慰めざるを得ないのである、釋尊が王城を出て苦行せられたとき五人の人がついて居つたが釋尊孤影山を出て尼連禪河を渡り村女の乳をのまれたときこの五人はその様を見て釋尊の修行をあやしみ釋尊をすてた、釋尊愈々成道して見れば先に我を教へたる彼等を先づ救はんと思ひ立ち給ひ先づ阿羅羅伽維羅維の許へ去り次で五人をも濟度せられたのはこれ自然の勞である、自利成就すれば利他はこれについて來る即ち宗教のつさみものである、信仰を得たものは社會人生の爲めにアツたいコトしたいと思ふ出来るものならば飽までやるのである、これが宗教の本義である、しかしながらこの度感じたのは心丈はあれもこれも思ひますが中々出來ないと言ふ事を經驗して居る既

に出來ぬ間に五十年の間に小さい智慧人間のあはれな考でやるのを彼佛にくらべて慈悲である智恵であるなどとは實にダイソレク横着な事と言はねばならぬと云ふ事を感じたのである唯これ皆報恩の萬一に過ぎぬのである、さればとて從來の事をすてるのではない、極樂の眞實の事は佛になつて再び人生に出て來るのが其の濟度と言ふべきである、歎異鈔の中に一慈悲に聖道浄土のかはりめあり、聖道の慈悲といふはものをあはれみかなしみはくむなり、しかれどもおもふがごとくたすけとぐることはめてありがたし、また浄土の慈悲といふは念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心をもておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり今生にいかいにをし不便とおもふとも存知のごとくたすけがたければこの慈悲始終なし、しかれば念佛まうすのみすえとをりたる大慈悲心にてさふらふべきと云々浄土の慈悲はこの世界へ來て思ふ存分出來るその本當の意味が解らなかつたが今に至つてその其意を感じ來るのである、人間のする事は浄土の慈悲の事を思へは實に聊かなる慈悲に過ぎぬのである、この肉の軀を變じて佛の國より來て始めて十分の慈悲も濟度も出來るのである、支那の曇鸞大師は魏から引續いて梁の時代に居つた人で浄土の註即論註に法華經普門品三十三身の事を引いてかかれてあるが、人が遠き海原へ船で往く忽ち荒が吹きさすむ或は非常なげしい戦に出で戦ふかゝる場合に心一向に觀音を念すれば今迄の恐れは忽ち消えうせてしまふなどかいてあるやうなのがこれ即ち極樂の世界より顯はれてある事を言ふたものである、この人生上

にッー云ふ力が種々の上に現はれてある、この度私の父の死に逢て父の廣大なる恩を受けしも皆佛の力の表はれてあると思ふ、この人生は更に人生ではない偉大なる力の現はれたる人生である、故に前に言つた様に人生より極樂に進み往く入の門と極樂から再びこの人生へ來る出の門との二つの門となる、それで私が講義を始めるときに非常に感じたのは、親鸞聖人が眞宗と言ふ組織をせられたるの始まりに講案浄土眞宗有二種回向一者往相二者還相往くと還るとの二つでこれ眞の極致であつて今申した人生から浄土にむかひ浄土から人生へ來るとキツト始めに書いてあるのは今述べた浄土論及び論註の極要領をとつて極他力の信仰の極致をあらはされたのであるその人生に來て佛力によりて濟度すると言ふが眞宗である御本書の書き始めにそれが書いてあるのである、死後涅槃の境は理想の極である、ッー思はぬうちは往相還相は左程感じなかつたが今度はそれを非常に感じて來たのであるこの親鸞聖人の御心がはつきり感ぜられるこの二種の回向が他力信仰の骨子である今日今時迄私の經驗に觸れなかつたのである、唯はんこて押した文字ではないのでこれは實に偉大なる御心であるのである、聖人は晩年二門偈と言ふのをかかれたが今迄云ふた出入二門が眼目となつてある、聖人の名親鸞と言ふのも始めの名は釋空て次に善信晩年に親鸞とせられたこれは浄土論の著者天親菩薩の親と論註の著者曇鸞の鸞をとつて御自分の名とせられたのである、この御本書もこの二人から來て居る、とうも是だ、讀むときザァツとかいてあるやうに見えるがそこが骨子であるので

ある入出の二つをば親鸞聖人がそこへもち来てそこに盡きて居る事を見られた、その上に回向とあるこれを御考へ下さるやう淨土論に行者の行が五つある、禮拜、讚嘆、依願觀察、回向の五念門とある、淨土論の主義では佛を信ずると同時に五念門を得るその事は自分の爲めでなく人の爲人の爲として往くその五念門の原因で第五の回向をとりて来る、

近門は禮拜に、大會衆門は讚嘆に、宅門は作願に、屋門は觀察に、蘭林遊戯地門は回向にちやんとあふ様になつて居るこれが普通の見方である、その回向の下がよく書いてある實に結構である、回とは回はす、向はむける、自分の方にあるものを向にむける我等が佛に向ける事である、然るに親鸞聖人は佛より衆生に向けること、する其佛の心は三連の心となるこれは一智慧門、二慈悲門、三方便門、論註の解によれば智慧の事を解釋して大層よく書いてある進むを知つて退を守る即ち知進守退進退をよく守ると言ふことを智と云ふ自分の爲めに頓着せぬと云ふ事であるそれは無染清淨心が智慧門の心である二に慈悲門とは被苦を慈と言ひ興樂を悲と云ふ故に衆生の苦をぬきて樂を興る安清淨心とある三に方便門とは正直を方と言ひ己を外にするを便と言ふ、一切衆生をあはれみて自分をよくする心をやめる樂法淨心と言ふ、

私はこの回向の下を見て非常に難有存じました、が要點でその回向は淨土論の文句よりみれば吾人がする事であるその回向は第一身をすて、人の苦をぬき樂を興へ己を外にして正直なる事を言ふ、サテかういふ事が出来るかこの世界に於ては到底出来ないその通りしたいが出来ない、茲に親鸞聖

人はこの回向を如何に見られたかこの回向を斷言して回向は凡夫がするにあらずと極端に言ひ放たれた、この回向は法藏菩薩のものせられた回向である佛陀のものせられた回向であつて吾々凡夫のする回向でない大變化して極端までもち行かれたのであるこれが即ち親鸞聖人の絶對他力にもつて往かされたその極致の無限の味のある所である、佛にむかひて回向する、死んだら亡者に回向する吾人の力て何が出来るものか、實に親鸞聖人は凡夫の回向を總て高き佛陀にもち往かれたのである絶對佛陀にもつて往かれた、吾人は罪惡の心惡毒の凡夫、然るに大悲の佛陀が吾人に代つてナニモカモ回向して下さるのである、

これを要するに淨土教の極致は佛を高められる丈高めてその佛にもつて往つたその回向を佛よりもらひうける、總て佛の回向であるから二種回向共に佛の回向である、佛の回向は何であるか本願力の回向である、第十一願は往相の願第十二願は還相の願それを總括したるが第十八願である、論註の終に出で居る即ち何もかも皆佛の力であるこれやがて信仰の力で佛陀が高くなればなる程吾人は軽く上る、たとひ吾人人間は無限なるも佛陀圓滿の願力によりて更に恐るゝ事なく進む事が出来る、善も惡もいらぬ佛陀の絶對の力を思ひ願力の強緣によりて佛陀の御前には往くのである、親鸞聖人の書かれたものは皆自分の經驗實行より來るのである、自分の師匠法然聖人は大勢至菩薩であるその肉の形ながら親鸞聖人に智慧を興へられた、聖德太子の御言は佛の慈悲の回向であるとチヤント確信して居られる、それは皆信仰の一念に得らる力て

ある、ソ一云ふ力が無盡に働いて常に佛力にかこまれるうち親鸞聖人の人生觀に歷々見える、一度感ずれば必ずそれによりてする、親鸞聖人に映するもの皆佛の力ならざるはない、佛に向ひて難有思へば佛の力によりていつの間にかこの世界に安心して居るの佛の力は即ち回向である、親鸞聖人の宗旨の骨目は皆自分の實驗の上より得られたものである、私は今更の如く感ずるのである、和讃に

觀音勢至もろとも、 慈光世界を照耀し、
有縁を度してしばらくも、 休息あることなかりけり、

又、
安樂淨土にいたるひと、 五濁惡世にかへりては
釋迦牟尼佛のごとくにて、 利益有情はまほし
聖人は釋尊もその一現象と見られたのである、死後の世界の廣々として望があるのみならずこの世界に於ても猶死後より再び此世に出て來る事の如何に興味多きか、本日は偉大なるすじを御話する事を得まして自分も深く感ずる事でありませ、宗旨と言ふ點でなく人間内心の實驗について益々味はして貰ひたいと存じます。

◎少年日露戰史

巖谷小波編
こは第三編九連城の巻として出づ。巻頭第一軍司令官黒木將軍の肖像をかゝる威風凛として四邊を拂ふの趣あり。第一章鴨綠江の地理を述べ、抽き出され、宛として親しく目視するの思ひあらしむ。附録として軍國讀本を載す。用意周到、蓋し少年諸君には無二の良師良友として先づ此編をすゝめむ哉。(定假十二錢、博文館)

閑文字

◎これより先、宗教家大會の開かれむとするや。朝野名士の賛成を乞ふこと頻々たり。人の馳せて圓了博士の門に至り來意を述べて之に賛せむことを望む。博士徐に語りて曰く、日露事急ならむとするや、露國佛敵論を草して世に公にす。今にして名を列せむこと竊に耻る所なりと。人、其旨を了して退く。

◎明治の女丈夫として、愛國婦人會主唱者としての奥村五百子、頃者疾を力めて東上せらる。新橋に迎へたるもの余に語りて曰く。女史例の如く面色膝黒、痘痕斑々として眼光炯々人を射る。三尺の秋水を手にして、凜として瀛車を降る。意氣すてに天を貫くものあり。人、怪みて其故を問ふ。女史劍を叩いて妾は遂に滿洲の露と消えんのみ。復問を發する勿れと。

小言八則

- 一。曇れる空は雨の兆候なり。顔の曇れるは不愉快の相なり。
- 二。多く語らずして辨ずるもの也。
- 三。死を語らざるものは勇者也。
- 四。人は釋廢を好むものなり。
- 五。生命は一吸呼の中に存す。
- 六。小なるもの貴し。金貨の如し、ダイヤモンドの如し。
- 七。知らずと答ふるより、知れりと答ふるは易し。
- 八。宗教は語るべきものあらす可味者也。

永井濤江君と吊するの辭

維時明治三十七年八月十三日、舊友近角常觀肅みて故永井濤江君の尊靈に白す。君か謹嚴なる風手復た見るべからざるか。君が眞摯なる談論復た聴くべからざるか。君至誠忠實の人、一たび感激して起つや、全然身を捧げて毫も惜む所なく。事に當るや、常に自ら犠牲となりて功を人に譲る。故に一旦身を以て人に許すや、遂に之が爲めに斃れずむば止まざらむとす。是確かに君が今日の不幸を來したる所以にして、吾人は君を稱して恭謙なる殉教者也と言ふを憚らざるなり。君、故東谷智源君と同功一體の人、今世稀に見る所の交遊なり。蓋し兩君が献身的行爲に至りては吾人が敬服措く能はざりし所、而して昨年東谷君逝き、今亦永井君逝かる。吾人は當年兩君が忠實なる言動を回想する毎に雙涙の順に交るを禁する能はざるなり。願みれば予の君を知る實に明治二十九年大谷派本山改革事件の時なりき。時に君、東谷君と共に洛東白川村清澤先生の宅に在りて、薪菜の勞を取りて最も樂めるの色あり。蓋し當時君の友人は運動に言論に四方に奔走して意氣頗る揚る。而して此時に當りて兩君は黙々として働き、白川の水に炊き、黒谷の薪を拾ふ。予は當年兩君の志を憶ふ毎に覺えず合掌して感謝の涙を注がずむばあらざるなり。其後君病を得て郷に在り。明治三十一年教導講習院の東京に移轉するや、固く君に請ふに舎監の任に當らむことを以てす。君快諾病軀を提げて東京に出て、興地觀園君と共に身を以て學生を帥ふ。蓋し教導講習院の振ひたる實に兩君の賜也。翌三十二年巢鴨監獄教誨師問題落着するに及び、君職を東谷君に托し、慨然として身を投じて同監獄教誨の事に従はる。蓋し君、全身を之が爲に犠牲に供するの覺悟たりしならむ。果然血を略して遂に今日教に殉するに至れり。是れ予が痛恨慟哭止む能はざる所以也。

一昨年予歸朝の後、政教時報誌上に於て外國傳道者の熱心を叙す。君大に感し病中書を送りて曰く。蓮師の鞋の緒のキラリと食ひ入り玉ひたる御足が今更の如く慕はしく候。如何ばかり御手間か、りし菊の花と、以て君が情緒の切なるを見るに足らむか。昨年清澤先生示寂の後三七日予羽州尾花澤に在り。一夕月色凄涼にして霜氣人に迫る、君を憶ふて感最も深し。乃ち窓懷舊の情を披瀝して君が病を慰めたりき。想はざりき、今日遂に君を吊せんとは、嗚呼哀哉。今茲予大澤夏期講習會に出席せんが爲めに初めて君が國に來る。哀哉。君既に幽冥所を異にして、君が温顔に接するに由なく、却て君か本葬の期日に會す。蓋し是れ偶然に非らざる也。予趨て其式に列せむことを欲する頗る切也。不幸にして講演缺くべからず、乃ち微志を筆紙に托して遺靈の下に陳す。嗚呼、君、今や如來淨華の聖衆として穢土の我等を見そなはし給ふなるべし。予如今嘆異鈔を拜讀す。曰く。彌陀の願船に乗して生死の苦海を渡り、報土の岸につきぬるものならば、煩惱の黒雲はやくはれ、法性の覺月速かに現はれて、盡十方の無碍の光明に一味にして一切の衆生を利益すと、蓋し是れ君か現時の靈境ならむか。我等實に渴仰に堪へざる也。冀くは君、還相の回向によりて煩惱の園、生死の林に遊戯して、我等苦惱の群萌の上に救済を下し玉へ。謹て啓白し奉る。薰手合掌、南無阿彌陀佛。

近角 常觀

同一鹹味

永遠の問題

百目木 劍 虹

人生五尺地に墜つ。何を知り、何を學ばむとする。而して何處に往かむとする。

かくの如き問題を捉へ來りて、よし臆ながら其影を窺はむとするものあらば、今の世にありて眞面目の人と云はねばならぬ。多くの人はこの問題を雲煙に付し去りて、望もなく光りもなく暗路より暗路に踏み迷ふのである。而してこの事たる萬古不變永久に滅すべからざる與へられたる問題にして、何人も故障なく答案を作らねばならぬ。時、數千年を隔つと雖、此の解釋を試みむとするに於ては今も變る所はない。處、數百里を距ると雖、この義務を果たさむとするに於ては更に異る所はない。吾は敢て義務と云ふ、人生の當然踏むべき道なればである。之を義務といふ、強ゆるの意は微塵もない。自家の頭燃を救ふを以て何人も之を義務といふものはない、人の爲めてはない、我身の爲めてである。古の人は曰く。

昨日一替死。今日一替生。暗裏換人人不悟。門前毎日見人行。

と。こゝに生あれば死あり、死あれば生あり、一死一生、一

生一死、暗裏人をかへて人生の起滅を示し、無常迅速を教ゆ。瞬間の怖るべき悲劇の幕は開かれてあるにも拘らず、雨は我庭に降りじと思へるにや、何等の願慮も用意も驚きもない。知らざるものは憫むべし、知りて而して眞意義を解し了らざるうちに、苦青き邊に眠るもの眞に憫むべきである。さらば、吾等は何を知り、何を學ばむとする、而して何處に往かむとする。

問題はこれ也。而して甚た直截也。問題とは何ぞ、曰く。生と死の問題これのみである。乃ち生を知り、生を學び、而して死を究めむとする意に外ならぬ。昨日雨。今日晴。前月小。後月大。君欲問百年。百季如此過。孰爲辱。孰爲榮。何者福。何者禍。山中多白雲。莫教脚一蹉。と、たしかにこれ人生の半面を深刻に穿つた語である。雨となり、風となり、晴れとなり、百年如此にして容易に過ぐるのみ。人は營々日として東に奔り、西に去らざるなく、而して得むとするものは名利である。願ふ所ものは榮達である。望む所は私慾である。これ果して人生の意義なりとせば、人生はと無意義のものとなるべし。否、人生は決してかゝる淺薄にして動物的のものではない。大厦高樓に臥して恣に涼を取るもの強ち榮とすべきではない。陶朱猗頓の富をかざねたりとて以て幸とすべきではない。要するに榮と云ひ、辱と云ひ、禍と云ひ、福と云ふ、これ何物である。世の以て所謂榮とするもの、權花一朝の榮のみ、辱必ずしも永久の辱ではない。福亦然り、禍も亦然らざるを得んやである。生限りあり、榮も限り、辱も限りあり。福も限りあり、福も亦限りあり。榮以て榮なら

ず、禍以て禍とするに足らず。禍福榮辱を以て心を動かすものあらば、未だ生の意義を知らざるものである。孔子曰く。

未知生焉知死

と。これ天來の聲、忽然として吾人の頭下に落下したるもの、まさに長夜の眠愕然として醒め來るを覺ゆるのである。ふかく死を究むるを要せず、死は研究によりて其影をも知り得らるゝものではない。却て疑問の雲は研究によりて増し來るのみ。死を知らむとするもの先づ生を知れと、此の一語によりて、千古永遠の問題は縦横に説き盡されて痛快に感ずるのである。

世の人、稍もすれば死は怖るべきものなりといふ。又實際怖るべき筈である。死の何たるを知らず、たゞ徒に死を解せむとして解し得ず、悶々遂に死の石を抱いて淵に投ずるもの比々皆然り、深く咎むるに足らぬ。死は死によりて解し得らるゝものではない。死を知らむとせば先づ死の岸上に立ちて見ねばならぬ。乃ち其岸は生のある所である。一步の差、生と死との別る、所以を思ひ浮べるであらふ。然るに多くの人は生と死、數千里相距るの觀念は容易に消え去らぬ。能々思へ、生と死とは云ふまでもなく現在と未來の關係である。龜鶴の壽を保つものにおいて或は永遠の思ひあらむ。露命を有する吾等、明日をも待たざる風情であるとすれば、生と死は甚た相近きものである。生のある一線を除き去れば死の境である、生は未來に對する連鎖である、この連鎖によりて吾等の生は保證されつゝある。連鎖の切斷する時は即ち生の岸よりして死の淵に沈む時である。

を看破したのである。

けれども自身樂きあけた石垣は時々風雨に冒されて壊され易い、如來清淨心より賜はりたる信念の城程堅固のものはない。水に溺れず、火に鎔けず、況して世の誘惑更に恐るゝ所はない。

無題錄

鈴木卓苗

人生五尺地に墜つ。何を知り何を學ばむとする。而して何處に往かむとする。
約して云へば永遠の問題、即ち生と死の問題これのみ。現在の生に於て大安慰を得たり、死敢て怖るゝに足らず。於是乎生死一のみ。生死の鍵は一あるのみ。

信仰を以てす。む者は恰も坦道を歩するが如く、信仰なき者のするは崎嶇たる山路をたどり行くが如し、前者の前には風塵なほ行程を遮ぎるなく、後者の後には常に悔恨と不平と滯滞との影ありて、彼が前途を呪ふあるを見む。

佛の言はく、夫れ道の爲めにするは、猶ほ木の水にありて流を尋て行くが如し、兩岸に觸れず、人の爲めに取られず、鬼神の爲めに遮られず、涸流の爲めにとゞめられず、また腐

死は暗黒を意味す。暗黒は何人も怖るゝ所とせば、死の恐怖たる常人の免れむとして免るゝ能はざるもの、之を責む、寧ろ酷である。死を怖るゝの人大に可なり、何ぞ進んで生を怖れざる、生を怖るゝ人は遂に安住の隠れ家を見出すのである。現在の一念に安住する人は亦未來に向て永遠の生命を見出したものである。生に安住する人はまた死に於て頼む所がある。死の問題は生の問題によりて始めて解釋せらるゝのである。死を知らむとせば先づ生を知れとの語、この永遠の問題を解し得て餘す所がない。之を宗教の要義より見るも、死の未來に就て深い詮索するに及ばぬ。現在の立脚地を定めて地盤をつくる必要である。若し外物の誘惑に遇ふて心を動かすやうでは、不安の生涯は獨り現在のみならず、未來永々劫に向て相續するのである。乃ち永遠の問題は未決のまま葬らるゝのである。

人すでに地に墜つ。目的の異なるは云ふまでもない。學を事とするもの、商に従ふもの、農に就くもの、何れも千差萬別である。人生の意義を明にするを以て其目的に光りが發するのである。人は遂に我身の上を知るもの稀である。暑さに遇ふては不平を云ひ、寒に遇ふては不平を云ふ、金を得て尙足らざるを思ひ、艱難に遇ふては逡巡し、失敗に遇ふては憂慮し、人を疑ひ、自ら欺き、天を怨み、地に泣くのである。これ全く人生の意義を解せざる罪によるのみ。人生の基礎定まらざる爲めである。例へ窮厄に際しても心境平かにして波の如く、不満の中に満足を見出すことを勉めねばならぬ。東坡が「因病得閑」と云はれしも此味にして、樂境到る處にあること敗せず、吾この木を保す、海に入ること決定ならむ、學道の人、情欲の爲めに惑はされず、衆邪の爲めに燒されず、吾この人を保す、必ず道を得べし。

沙門あり、一夜、迦葉佛の遺教經を誦す、其聲悲緊にして思ひ悔て退かんと欲す、佛之に問て曰く、汝昔家に在りし時、曾て何の業をか爲せしや、對て曰く、愛して琴を彈せり、佛言はく弦緩なる時は如何なりしや、對曰鳴らざりき、しからば弦急なる時は如何なりしや、對曰聲絶えたりき、しかり急緩その中を得たる時如何なりしや、諸音普かりきと對ふ、こゝに於て、佛の言はく、沙門の學道するも亦然り、心若し調適せば道を得べし、若し道に於て暴なれば身疲る、其身疲るれば意即ち惱を生ず、意若し惱を生ずれば、行即ち退く、其行既に退けば罪必ず加はる、故に但清淨安樂なれば道失せず、(佛說四十二章經第三十四)佛のこの所説をよみて、今の世の信仰を叫び道を説くもの、言ふ所に思ひ至れば、其差天淵のへだたりのみならず覺ゆるなり。

エマソン曰く、一時代の宗教は次の時代に至れば文藝の一種となる、…變化の止むを得ざるは、新時代の人が舊時代の人の如き眼を以て見るを得ざればなり、但し此變化たるや外部に止まれるのみ。其主義神髓に至りては永劫不滅なり。

佛舍衛國なる祇樹給孤獨園に在したる時、長老須菩提に向

ひ玉ひて曰く、
須菩提よ、如何にか意ふ、三十二相を以て如來を觀たてまつるべきや、あらずや、
長老言く、
しかり、しかり、三十二相を以てして如來を觀たてまつらむ、

佛彼に告げ玉ふ、
若し三十二相を以て如來を觀たてまつらば轉輪聖王も即是れ如來ならむ、と

長老須菩提佛に白して言く、
世尊よ、今佛の所説により、その義を解すれば、三十二相を以てしては、如來を觀たてまつるべからざるなり、世尊よ、に於て偈を説いて説き玉ふ、
若し色を以て我を見、また
音聲を以て我を求むる者あらば、
是の人は邪道を行ずるなり、
如來を見たてまつること能はじ。

佛の所説の中に因縁所生の道理あり、シリストの教にこれあるを聴かず、
因縁所生の道理は原因結果の方則に外ならず、唯その所説が、甚だ宗教的なるが故に、人皆之をさとするなしと雖も、今日算數の學が十一^トの方則を説くと何等の異なる所なし、されば、其所説の深遠洪大は乃ちあらむ、理としては敢て差違なきなり、今日の科學が原因結果の法の上に立ちて一切の

不朽の眞理の光に浴しやうと苛るが、急ぐに氣をとられて、狡猾なる蛛が光と爾との間に網を張つて居るのに氣が着かぬのである、忽ち之に打衝つて四苦八苦身悶へする、愚かなり、今は頭を挫かれ、翼を摧かれて、運命と云へる鐵爪の裏に匍いて居るではないか、
* * * * *
其弱い翼で或は可恐しい眞は破り得るとした處で其て光明に達し得らるゝものと思ふのか、否々まだ硝子がある、透明な障礙物がある、銅より堅い水晶壁がある、余等の哲學と眞理との間に横はれる障壁がある、さあ爾は如何にして之をこゆる氣か、空なるかな、人智幾多の大人皆自ら欺いて遙かに來り、障壁に會ふて頭を碎いて斃れざるものは、惟ふに幾何ぞ、其不朽の障壁の下何ぞ鬼哭のしかく嗽々たるや。

文藝は牛乳の如し、
毎朝一合の牛乳、何等の滋養をか加へむと言ふ勿れ、其食物を調和し、消化を助くるの効實に大なるものありて存すといふ、文藝の作品は詩歌小説美術に至るまで、其何れを欠くも人生は爲めに困憊する所あるにあらずと雖も、しかもこれによりて、人生は一切相互の間にその調和と光輝と希望とをもち得ること、決して少々ならざるなり、ことに智情の調折を致すことに於ては、詩歌小説を措いて、他に何をか求むべけんや、故に曰く「文藝は牛乳の如し」と。

解釋をなさんと試みたるによりても、因縁所生の道理を有する佛説は、かの所謂有神論とは、相去ること甚だ遠きを見るべきなり、今日如來を口にし、如來を讚述するもの多し、冀くは吾等の如來とクリスト教に所謂神と如何に相違する所あるかを、忘失せざれ。

文豪ユーゴの三大雄篇の一なる、ノオトルダムド、パリ(鐘樓守)をよむ、中に痛快なる一譬喩あり、淺薄なるわが文藝界に慚らざる人よ、之を讀んで如何にユーゴの作品が宇宙の中心に接觸せるかを見よ、
小窓に絡はつた蛛の巢を賤めて居ると、折しも愚かな小蠅が一羽春の日影を慕ふて飛來るよと見る間に網にかゝつて身動きならぬのであつた、
巢の揺れるに氣がついた大蛛が一匹、真中から飛出したが一躍して蠅にとびつき、見る／＼之を捲込んで、やがて其可恐しき唧筒もて蠅の頭から血を吸始めた、
* * * * *
あゝ、然だ、此が世の狀態だ、飛廻る、機嫌が好い、今纔かに生命に入つたばかり、春の日を戀ふて、麗かな大氣中に、自由の翔翔を悦んで居つたが、噫倏忽にして細に打衝かる、蛛は得たりと立ろに之を取押へる、彼の毒々しい蛛が無慚にも、薄命な——ねえ君御覽なさい、之が運命です、あゝクロオド(自分ノオトルダム寺の副牧師)爾は蛛なり、が、クロオド爾は又蠅なり、爾は飛んで智識の方、光の方、太陽の方へ往かうとする、爾は百万勞苦して瀕氣に達し、

エビクテイト曰く、
精神は平盤の水の如く、外界の万象は光りの如し、水動けば、光亦動く、しかもこれまことに動けるにあらず、と
* * * * *
八月四日夕風ある相州茅ヶ崎にて

有絃無絃 (二)

琴書之趣

洪自誠の棊根譜に曰はく、
人解讀有字書、不解讀無字書。知彈有絃琴、不知彈無絃琴。以迹用、不以神用、何以得琴書之趣。

げに琴書の眞趣は、无字の書を読み、无絃の琴を彈する所に在らん。然れども、有字の書有絃の琴も又廢すべきに非ず。要は、有字无字に通じ、有絃无絃に洽ねき、終古靈活の二物を會得するにあり。未だ個中の眞趣を會得せず、何くんぞ琴書の眞趣を解するを得む。

大の一字

觀无量壽經にのたまはく、
佛心者、大慈悲是。佛心は、徹底是れ慈悲なり、而かも其の慈悲は無限大なり。是を以て、宇宙の廣大も包盡して餘し給はず、人心の幾微も照破して知り給はざるな

誰か敢て佛陀の慈悲を探討して、未だ逢着する能はざることを啣つて思を爲すものぞ。吾人已に佛陀慈愛の廣海の中に生息しつゝあるなり。吾人一切の煩悶は、たゞ之れを自覺せざるに基因す。知らずや、歸來笑捻梅花一嗅、春在二枝頭一已十分なるを。吾人一度此の自覺に到達せば、宇宙の歸趣人生の意義は、釋然として解決せられざるなし。

赤裸々

彼れ我れの長處に憑恃し、我れ彼れの長處に信賴するの間には、未だ眞平の友誼は成立せざるなり。相互に一は他の長處と共に短處を知り、短處を知りて而かも其人を棄つる能はず、管に之れを棄る能はざるのみならず、却て其の短處に於て、一種言ふべからざる靈趣を感じ、兩者が其の長處に由りてよりは、寧ろ其の短處によりて、より強く吸引され結合さるゝ場合に於て、初めて莫逆の友情は完結せらる。換言せば、兩者の赤裸々たる所に於て眞成の友情は涌出し初むるなり。吾人と佛陀の關係に於て、頗る其趣きの之れに近きもの有り。未だ徹上徹下自ら度すべからざるものなるを自覺せず、敢て偽善の假面を被りて以て佛陀に對す、苦悶の絶えざる所以なり、知らずや佛陀の靈光は、吾人の假面を透射して、直に吾人内界の奥底を照破し給ふことを、假面何の用ふる處ぞ。況んや佛陀の靈光は、如何に明なりといふとも、察々以て吾人を睨呵し給ふにあらざるに於てをや。されば、宜く無用の假面を抛擲して、赤條々直に救済の慈容に對すべし、春光長へに汝の天地に麗かならむ。

親鸞聖人の和讃に

といへども、神韻風姿、隨て轉じ隨て變じ、愈々出て、愈々奇なり、千變万化端倪すべからずして、而かも常に其の富士たるを失はず。富士の現はるゝ所には、凡ての俗調之れに由りて雅化され、一切の平凡之れに由りて靈化さる。是を以て、朔風凜冽の日と驕陽燦くが如き日とを問はず、東海道の旅客は、只此の一富士に由りて、其の倦怠を訴ふるの不幸を除却せらる。斯くて富士は、長へに人をして、其崇、其美、其靈を讚美嘆賞せざらんと欲するも能はざらしむ。

吾人人生の意義と生活の趣味とを、唯一佛陀の救済に於て見出し來るものは、東海道の旅客と頗る其趣の相近きものあり。吾人は造次頓沛、佛陀の慈愛を念じて、須臾も忘却せざる底の生活を繼續すること能はざるを遺憾とす。然れども、一度佛陀救済の御手に攫捕されたる吾人は、應事接物の間、慶吊悲喜の間に、忽ち忘るといへども又忽ち浮び來るなり。佛陀の慈愛を想ひ浮ぶる所には、自然と人事とを問はず、當面の諸衆悉く靈化され、暗齋たる人生に忽爾として一道清新の光明を認む。かくて吾人は人生に對して、倦怠の念と厭忌の情とを抱くべき所以を發見する能はず、只感謝と奮勵と有るのみ。

善、惡

蓮如上人御一代記開書に曰はく、善きことをしたるが惡ろきことあり、惡ろきことをしたるが善きことあり。善きことをしても、我れは法議に付て善きことをしたると思ひ、我れといふとあれば惡ろき也。惡ろきことをしても、心中をひるがへし本願に歸すれば、惡ろ

如來の作願をたづぬれば、苦惱の有情をすてすして、廻向を首としたまひて、大悲心をば成就せり。煩惱具足と信知して、本願力に乗すれば、すなはち穢身すてはて、法性常樂證せしむ。

太閤頭下の富士

狩野永徳、豊臣秀吉の命により聚樂の御所に富士を畫く。畫成て秀吉之れを見るに何物をも認むるなし。之れを永徳に問ふ。永徳答へて曰はく、請ふ公少し頭を下げらるれば明かに富士を見るを得べしと。秀吉此に於て、其頭を卑くして之れを望めば、模糊たる雲烟の中に富士山の屹然として聳ゆるを見る。満座の士大に之れを感ず、之を太閤頭下の富士といふ。

知識の頭を擡げ、道德の冠を戴くし、傲然として立つ人の眼中には、大悲救済の尊容は現せざるなり。漫に賢善精進の相を衒ふの頭を下げて、猛省一番、直に内懷虚假の身たることを自覺し來らむ乎、如來矜哀の慈容は、巍々として説々として、七情雲霧の中に現はれ給はん。是を以て佛陀は豫ねて誠め給へり、憍慢と弊と懈怠とは、以て此の法を信じ難しと。

東海道

鐵路蜿蜒々として東海道を下るや、車窓、富士を望見して又之れを失却し、失却して又之れを發見するもの、其の幾回なるを知らず。或は連山起伏の上に、或は渺茫平原の中に、或は懸崖絶壁の際に、或は亂松疎篁の間に、或は一碧万項の彼岸に、忽ち得て忽ち失し、乍ら失して乍ら得、八面玲瓏なり

きことをしたるが善き道理なる由仰せられ候。然れば蓮如上人は、まいらせ心が惡ろきと仰らるゝと云々。

一個矜字、一個悔字、

榮根譚に曰く、蓋し世功勞、當不得一個矜字。彌天罪過、當不得一個悔字。と、洪自誠の所謂一個悔字は、蓮如上人の「心中をひるかへし、本願に歸す」なり。洪自誠の所謂一個矜字は、蓮如上人の「我れといふと」參らせ心なり。

修養四則

蓮如上人御一代記開書に
一、何ともして人になをされ候様に心中を持べし。我が心中をば同行の中へ打出して置くべし。下々たる人のいふことをば用らずして、必ず腹立するなり、淺間敷事なり。たゞ人になをさるゝ様に心中を持つべき由に候。
一、たとひ無き事なりとも、人申候はゞ當座に領掌すべし。當座に詞を返せば再び言はざるなり。人のいふことをば只深く用心すべき也。是に付て或人、相互に惡しき事を申すべしと契約候ひし所に、則ち一人の惡しきさまなる事申しければ、我れば左様になさざれども、人の申す間左様に候と申す。されば此返答惡しきとの事に候。さなきことなりとも當座はさぞと申べき事なり。

一、常に我が前にては言はずして、かげに後言いふとて腹立することなり。我れは左様には存せず候。我が前にて申に人々は、陰にてなりとも、我が惡ろき事を申されよ、聞

南村閑話

て心中をなすべき由申され候。
 一。人の悪ろき事は能々見ゆる也。我身の悪ろき事は覺らざるものなり。我身に知られて悪ろきことあらず。能々悪ろければこそ、身に知られ候と思ひて心中を改むべし。たゞ人のいふことをば能く信用すべし。我が悪ろき事はおぼえざるものなるよし被仰候。

翁、われに一概の洗茶と藤村の田舎饅頭を進めつゝ、少しも暑さを知らざるか如く、且つ談下且つ論し、諍乎として倦む所なし。鍾鏗たる哉、斯翁。例によりて翁の談を綴る。清風腋下に生ぜずして却て流汗の額に溢るゝあり。これ翁の談の興なきにあらず、記者の暑熱に苦むが所以なり。阿々。

一 記者 者

◎扇面には容易にかゝれむものぢや、常に手を離れぬものゆゑ、其人の爲めになることを考へねばならぬ。此間兒玉參謀長が出征せんとした時、一寸見舞に行たが、坐にある扇子をとりて、子曰、事忠臣、行篤教云々の句と知者樂水、仁者樂山云々の句をかいて、七十八翁菩提としてかいてやつた。◎印度の佛教は究理佛教なり、九十六種の外道があつて、有宗だの空宗だの、色々と議論をやつたからである。支那は學問佛教である。併し淺薄である、迎も鸞飛て天にのぼり魚淵に踊る底の事はわかるまい。獨り日本は護國佛教で、印度、支那に異りて特色のある所である。今の佛教者は少しも之を思はぬやうだ。

ふのも花の咲くのも、花の落つるのも皆大幸であるといふてかいてある。弘安頃の人で此の和尚の歌に

うつしおく形見のほかにたつねなよ

これこそやかて我身なりけれ。

名にしほう水はなけれと身と共に

涙なかるゝ白河の關。

立歸り又影うつす鏡山

くもりなき世に逢身とそおもふ。

つれなくて今日までは猶なからへつ

いつを我身の終ときかまし。

さらぬたにさひしきものを旅空

いとしなれとや秋の夕暮。

◎聲聞とは即ち諸漏已盡、無復煩惱、得已利盡諸有結、心得自在である。又以慈修身善入佛慧通達大智、到於彼岸。とあるは菩薩の行である。

◎會て棋伯中川龜三郎に遇ふた事がある。晴れの勝負の時は心配であらふと問ふたら、なに勝たふと思はず、只過ちないやうに勉むるから心配でないといふはれた。一藝の士は皆語るべしと佐藤一齋の言志録にあるが、大なる教訓を受けた事があつた。今にも時々此事を思ひ出るのである。

◎むかしの大名は長持に溢るゝ程手習草紙があつた。まあ十萬字位稽古したら少し位かけるやうになるであらふ。

◎明恵上人の傳を讀むた時、或時上人室内にありて、ふと侍僧を顧みて奥の方に何物か苦しめられてあるやうだから見

◎日本紀に推古天皇二年春二月寅朔朝、皇太子及大臣令興隆三寶、是時諸臣連等、各爲君親之恩、競造佛舍、即是謂寺焉。

これが寺の始まりである。

◎蚊一つに施しかねる我身かなの句あるが、吾ながら仕末におへぬ体である。

◎これを以て見ると彼の待定和尚の如きはえらいものであつた。行狀記には委しく出てあるが、鼻も耳も手も皆を以て人に施した、誠に道心無量であつた。遂に羽州最上川に入定してしまふた。蚊一つに施しかねる我々は迎も萬分の一でも此の和尚に眞似るとは出来ぬ。

◎無常迅速時人を待たずで、どうもうか／＼として暮してしまふ。法華經に湛然水草、餘無所知。とある。吾々も水草のやうなものだ。なか／＼頭燃を救ふ人はない。

◎自淨其意なんて、えら／＼な事は出来るものではない。

◎明恵上人が松茸すきなるを以て、或人が之を贈たそうだ。すき、さらひなどはいへぬものぢや、況して佛教すきなど、は固く禁すべきであるといふはれた。

◎人は贅澤を云ふべからず。此節はうなぎ又は鱒などと奢る事ばかりだが、粗食粗糲でよい。命をつなげば足る。命をつなく、即ち道を行はむ爲め也。

◎道は儒釋の私すべきものでないと誰れやらが云ふたが、味ふべき事である。

◎鎌倉寶戒寺の惠鏡和尚は何事に遇ふても大幸である。何物を見ても大幸である。不幸に際しても大幸である。鳥の謳

届けて來れよと命じた。侍僧ゆいて見れば何ぞ圖らむ、蜘蛛の巢に蝶一つかゝりて羽たゝきして苦むておつたと云ふ事がある。私は之を信すること出来なかつた。實地を見ずして心に感得して之を悟るなと、云ふ事はあり得べからざる事と思ふたのである。

◎處が峨山和尚の逸話を讀んで大に感した事がある。それは明恵上人の話とよく似て居る事柄である。或時峨山和尚が講議をしておつた、ふと思ひついたやうに庭で何事かあるやうだ、誰ぞ見て來れと命じた。侍者行きて探せども何物も見當らずして歸る。たしかにあるやうだ再び探せよと云はれて、また起ちて之を見るに果して庭の隅に蝦が蛇に吞まれむとしてある時であつたとの事である。

◎明恵上人はむかし／＼大むかしの事である。峨山和尚は明治今日の話である。之を信ぜられぬ話として排斥すればそれまでの事である。併し世の中は解すべからざる不可思議の因縁がある。吾々凡智よりせば迎もかやうの事は感ぜられぬが、大徳の眼から見れば見えざるものと雖、明恵上人の如く、峨山和尚の如く感ぜらるゝとは有りうべき事であると、始めて心付いたのである。

◎東西本願寺は全く亂世だ、これでは手の付やうがあるまい。むかしは東坊主に西役員と云ふて、東本願寺は學者が權力を振ふたもので、西では役員が威張たものである、今でも其傾向があるやうだ。小田はどうだとかこうだとかいふて役員を攻撃するは、全く役員に勢力あるからである。東では學者派がいたく重きをちかれて居るやうである。併し學校をつ

ぶすなんて意氣地のない話だ。

◎此間引窓の緒をむすぶ爲め、家内の止むるもさかずして踏臺に上つたが、ウシロへ引つくり返へつたが、幸に怪我なくて安心した。併し妙なもので傷を負ふべく當然の事柄で災難を逃るゝことあり、負ふべからざる事で負ふ事あり。因縁である。不思議である。

◎一樹の蔭、一河の流他生の縁と云ふことが、淨瑠璃文句に見る所である。之が出處は多分妙眼論の中より出た事であらふ。讀むて御覺なさい。

或坐一國、或住一郡、或處一縣、或處一村、宿一樹之下、汲一河流、一夜同宿、一日夫妻、一所聽聞、暫時同道、半時戲笑、一言會釋、一坐飲酒、同杯同酒、一時同車、同疊同坐、同休一臥、輕重有無、親疎有別、皆是先世結縁。

文章もよいが、先世結縁が味ふべきである。

◎儒者は天だの、命だの、運命だのと云ふけれども、少しも因縁と云ふことを知らぬ。どうも淺薄なものぢや。

◎貴い物は兎角價ひ安く見るものだが、これ大に心得べき事である。

◎太田南畝の達磨の賛に「やよダルマちとこちらむけ世の中は雪月花酒と三味線」の狂歌あるが、世の中を達觀した處如何にも面白いではないか。

◎一齋の言志録に、靜に聞けば婦人小人の語も亦天籟の聲であると云ふてあるが、どんな人の言ても虚心にさけば味あるとの事である。

◎私は近頃思ひ出して縮冊の縮冊藏經を出版せうと考へて

居る。費用も二十圓位で誰でも一部買ひ求むる便利を圖ふとして居る。かく思ひ付たのは、今度の戦争によりて幾萬の軍人が戦死をするのだから、むかしは追善のため寫經をしたものゆゑ、寫經の代り廉價に販賣して各寺院に一部づゝ追善として遺族より寄附させやうと考へたのである。

風尚餘韻

麥藁笛

吟

草分けて水汲みに来る夏の川
麥刈の日ねもす吹くや麥の笛
藪蔭に蘇の花や杉の雨
物洗ふ人の聲あり夏の月
低く垂れし厠の道の南瓜哉
夏草に交りて知らぬ黒き花
古寺や蜥蜴横ぎる蓮の池
河骨の上を黒蝶山蜻飛ぶ
萬頃の青田一反の蓮田かな
黍の葉に涼しき月の登り鬼

* * * * *

魔鏡 (テニソ)

菊池 曉汀

清き流れの兩岸に

涯みは廻く天とあふ

青草深き大野原

中を過ぎ行く道一つ

通ふは彼方カメロット城、

流れに浮ぶ鳥が根に

咲ける蓮華の香は高く

妙なる色をなかめつゝ

村人は行くシャロットの鳥

翠下垂る青柳

靜かに渡る風清し

鳥をめぐりてカメロットへ、

薔は野邊にほころびて

永劫不斷に流れ行く

水に綾なす花の彩

鳥を包める城壁や

高く聳ゆる高樓の

四方の色はふりにたれ

住めるは誰か? シャロットの姫!

垂柳色濃き岸の邊を

歩みも遅々と牽かれつゝ

青馬は行き重けにも

荷積める大船は風孕み

綾羅の帆あけてはしり行く

行衛は彼方カメロット、

雲たち迷ふ窓にうて

手招ぐ姫の御姿を

誰かは見しか知らめやも

やさしき乙女姫のみ名

乙女! シャロットの姫を。

紫雲たなびく曉に

麥刈る男等は迥にも

清き流れの源の

カメロットの高樓を

もれて聞こゆるおもしろさ

妙なる調べ情ある

姫が歌をば聞きたりと、

かくて月下に疲勞れたる

刈穂積むとて風通ふ

高き岡の邊に運ふとき

「聞こゆ! カメロット姫が歌」と

皆耳かたふけてさゝやくよ。

(つづく)

幟屏樓日誌 (紅劍)

これむかし曾て南村翁の名くる所、今の求道學舎これ。七月廿九日 朝、四時床を出づ。例の如く不忍池畔をめぐる。雲密にして空の色あやしくなりぬ。果して此の日期より雷公雨師を呼び来りて、吼り狂ふ。夜に入りて銀分あし。吉浦君態々朝顔を持ち来りて余が枕頭にめくまる。眠るともなくいつのまにやら清き夢を結ぶ。

京都關西講習會に臨みし旭村翁よりはがき来る、曰く。佛師の御惠深く到處信念熟す、明廿八日歸國、三日間滞在、一日歸京の積りに候。

京 都 常 觀

◎三十日 朝、清く晴れ、緩歩四顧に適す。朝顔二輪ひらく。今日は日曜なり、されど講話もなし。鈴振ふ役目もなし。午後、廣告文などかく、白土君来る。はては近角氏と三宅(雲嶺)氏の批評談など試みられ、いと興を惹きぬ。門外漢の批評強ちすつべきにあらざらんと思はれたり。長野の宮崎の君訪はれぬ。君が信仰談をきいて益々ゆかし感ぜらる。時々遠雷の音をきく、幸にして雨にたらず。明日歸るべき筈の旭村翁夜遅く歸り玉ふ。

◎八月一日、二日 兩日とも旭村翁と語るの外、格別の事なくして暮しぬ隣の人、他へ移りゆきぬ。空は何となく曇り勝にして、雷鳴折々きこゆ晴れ間を見て鳴く蟬の聲喧し。

◎三日 朝顔の花は日の暮るゝをも知らず余が机邊をかざりぬ。この夜近角氏約束の原稿をかくの時日なく盛岡に向て出發す。桑門君來訪、十時過まで閑話を試む。

◎四日 朝、一友を訪ふ、あらず、南村翁の許に立ち寄る、亦不在なり。午後藤村兄来る。博士になるまじと語らる。されど博士號を得たらむも亦嬉しかずやと云へば、それもいなむべきにあらず、はては大笑着て歸へらる。田中城南君來り訪はる。君は東本願寺の命を受けて久しく清國にありて、學堂を設け教育と布教に現に従事せられつゝある也。夜本郷街を過ぐ。夜色くらく冷気秋の如し。

夜狹野氏の母黨と語る。

十二日 午前藤村兄來りて耶蘇の新説はせまいやうだが、絶對他力の信仰は廣しこれ佛敎に入りがたき所以なるべしなど語らる。近角氏より講習會の盛況を報へ来る。

午後さめ來りて悟密淺筆を讀む。興少なし。南村翁曰くこれ功利的の學問なりと。十時餘に就く、むし暑くして眠ならず、乃ち筆を執りて翌三時に及ぶの原稿はこれにて成る。うらめしきは旭村翁なる哉。

十三日 南村翁來る。語、口を衝いて出づ。われ狂句あり。斯翁長 廣舌。舌端生風雲。

午後上野に遊ぶ、歸路旭村翁に電報を發して原稿を促す。

十四日 暑さ烈し、近角氏より漸く原稿いたる。まとめて活版處に送る。編輯の任またつらい哉。人の貧家を求むるに來るものあり。家賃を語れば高しといふ。而して家は壞れたり、壁は破れたり、垣は損たりといふ。小言を并べて去るもの多し。余戒めて曰く、人生家主となる勿れと。阿々。

學舎の建物甚だやぶれたり。大工を呼んで小修繕をなす。留主の任亦つらい哉。號外の聲日としてきかざるなし、憤れて何とも思はぬやうになりたり。あさましき心なり。

わが上村總監は浦鹽艦隊と激戦し、敵艦一隻を沈没したりとの快報至る、近來の快事。

在清、伊藤賢道氏の紹介を以て、清國人某近角氏を訪ひ来る。下婢出て不在なりと答ふ。乃ち筆を執りて左の如く記して去る。

旭村先生大八閣下久聞大名如雷澤耳本擬早謁崇階以聆大教不料樋口龍藏君返已舊居引導無人莫遂登門之願令朋友同來適因事出室避人遙憫憐如廣願擬內京至橫濱小住數日再至大阪京都以廣眼界大約陰曆八月上浣可返國也奉上敬來師一函伏乞御覽倘有回音請寄半込區袋町三番地惠比壽館內華振傳寄也餘不贅述留此字叩謝當面談叩叩道安

陽曆八月十四日申

後學 廣 碩首

◎五日 微雨、硝瓶の金魚月を越ゆれども、曾て死を知らざるもの如く躍々として水な樂む。南村翁の魚千里の語を思ひ出す。閑に乗じて劉氏人語を讀く中に

畜二小魚數尾一時々觀之、或問其故、曰、欲觀萬物自得意之句あり。大に味ふべし。

◎六日 桑門君朝より來て暮に歸る。この日より晴る、暑堪へがたし。學舎には余と老ひたる下婢一人のみにて、さびしさの限りなり。折々鼠の騒ぐ聲に驚かざるゝもおかし。老妾の越中訛りもおかし。

◎七日 筆を執るに懶し、いつのまにやら眠に落つ。枕頭の風は清くして山中に高臥するの思ひす。醒めれば日はすでに午なり。二三の來客に接す。後ち和田兄を訪ふ不在。

◎八日 舎の穴澤君來らる、友を來國に送らむが爲めなりと云ふ。晝飯を共にして筑波山上の勝をきく。この日暑さ愈々烈し。夜亦筆をとる。佐々木君より消息あり。

啓 先月末忽然當國山間の境に入り申候。日光冥く山厚く曇み嵐氣身にしみて溪間幽鳥の聲をき、山開け霧つくるの處涼々の響ありてまのあたり「齋聲即是廣長舌、山色豈不在清淨身の實感にうたれ候。境靜かに人質に、至る所に於て佛の人に接し申候。法兄當時健康如何、南無阿彌陀佛 八月 三河 佐々木鹿村

◎九日 朝、不忍池畔をめぐる、露ふかし。佛前に禮拜しつゝ、心のゆくまゝ聖教をよむ。老下婢は跪いて聲を擧げて聲々御名を唱ふ。ありがたく感ぜらる。岡田田君より銀書をおくり來る、悲痛讀むに堪えず。歸省中の鷗浦君より來信あり、原稿つけぬとの事也。敢て問ふ、鷗浦の滌中空しきや、否や。

◎十日 人皆苦炎熱。我愛夏日長。

◎十一日 甲府の茶名君夏みかんを桃を持ち來らる。氣焔を吐いて歸へる。われ君と御嶽山に上らむとを約す。此の日鳥貫君飄然として來り、舎の人となる。

政教時報

編輯たより

◎如何にして此夏を送了せむかとは、年々頭上に浮び來る問題に候。昔の人は此問題を解して人皆苦炎熱、我愛夏日長。と歌ひまたは心頭を滅却せば火亦涼の句を取りて銷夏の法に代へ候。こはあまりに主觀的に候得共、避暑を以て一種の娛樂と心得、之によりて罪惡を行ふ邦人に取りては一服の清涼劑として、まことに妙藥と存候。

◎或人曰く。暑をして我を畏れしむべし、暑をして我を避けしむべしと。これまた一種の避暑法に候。

◎されどはじめより避暑など思はざるこそ、暑さも容易に凌げるものに候。

◎我は夏日の長さよりば、朝の短かくして其清らかなるを愛するものに候。

◎われに赤十字社あり、而して日露戰爭起るに及むて特志看護婦の團體起る、多くは貴婦人の發起にかゝるといふ。事洵に美なり。曩には萬里の波濤を越へて我國に來りて、親しく勇士の傷を勞はるる特志の婦人あり、博愛の精神、吾等の銘記して忘れむとして忘るゝ能はざる所に候。

若し我が特志の婦人にして事情の許す限り、身を挺して血醒き戰場に馳せて病める者を慰め、傷める者を勞らば、將と云ひ卒と云へ其情果して如何ぞや、唯感泣して其情け深き涙に咽

ぶならむ。而して士氣を鼓舞するに於て大に興りて力ある事
存と候。國家の事變に際して憂ふる者男子の本分のみには無
之候。

●軍人の葬儀を營むに於て出來得る限り、莊重にして、會
葬者も亦肅々として喪にあるの念を以て靈柩を守られむこと
を望むや甚だ切なるものあり。彼の會葬者か私語喃々として
笑ひさゝめくが如きは、見にくきのみならず、靈柩に對して敬
意を表するの意なきものと存候。況して國の爲め戦場の露と
消えたる勇士の葬に會するをや。

●東本願寺は財政上、眞宗東京中學を閉鎖して、眞宗京都
中學に合併致候。眞宗大學も大節減を加え候由に候。

●釋宗演氏はこの秋渡米せらるゝ由。

●愛國婦人會はすでに二十万の會員に上り候由。婦人の團
體としては組織も整頓し、從て今後時局問題の終局と共に目
覺ましき活動を見る事と存候。

●戦地の求道諸君より書を寄せて雑誌の寄送を望むもの、
甚だ多く有之候。如何せん、其筋にては新聞の發送は許すも
雑誌の發送は許可せざるを以て遺憾に相感じ居候。

●出征軍人家族の救護として物質的の救済を以て満足せ
ず、進んで相當の職業を興ふるは目下焦眉の急務と存候。

●大谷派新法主が去月眞宗中學卒業式の席上に於て剴切な
る左の訓示を興へられ候由に候。

茲に眞宗京都中學卒業證書授與式を舉行するに當り一言卒業生諸子に興ふ、先
達の語に幼少なるものには先づ物をよめと仰せられ候、又其後はいかによむと
も復せば詮あるへからざる由仰せられ候、ちと物に心も付候へばいかに物を
よみ聲をよく讀みしたりぬるとも義理をわきまへてこそと仰せられ候、其後は

いかに文藝を覺えたりとも信がなはいたつら事よと仰せられ候、と何ぞ教諭
の剴切懇到なる今や教界多事の秋に際し諸子木學の業を卒へたり幸に慈訓を服
膺し進んで學業の大成を期すると共に愈信仰の念を厚くし其分を誤るなからん
ことを望む。

●戦時佛教家の言行として「時代思潮」に論じたるもの、よ
く佛教家の弊を指摘し得て、亦た痛快に覺え候。

●愛なき慈愛、誠なき眞實、現代佛教家の風潮はこの二事に盡せり。吾等は吾等
の友なる佛者が壯烈の意氣を以て軍に従ふを送りぬ、又敬すべき佛僧が死を冒
して同胞の爲に敵國に深く行き去りしを聞きぬ。佛陀の力は尙此にあり、信仰
の靈火尙未だ全く日本佛教を去らず。而も國內佛者の風潮を見れば、彼等の
多数は云ふまでもなく、その中の先達すら、滔々流に順ひ世と共に涙を揚ぐる
の徒のみ。

●宮城縣登米町の道友よりの書信に、「生は昨年信仰の餘瀝
を求め、實に限りなき生命に逢着致候。本年は我登米郡教育
會夏期講習會に於て教科書として信仰の餘瀝を用る候。實に
宗教的趣味の教化の難有事と奉謝候。これ近角師の靈光の導
て感謝致候」と有之候。吾等も竊に大なる佛の力を感謝致
候。

同人消息

- 近角氏は長野縣下水内郡太田村の講習會を了へて本月々末歸京可仕候。
- 第一着に歸京せられたるは島貫氏に候。
- 穴澤氏は本月八日所用ありて一寸歸京せられたれども、再び筑波山上雲深き
處に立籠られ候。
- 久保護躬、松崎登淳の二氏は、この度第四高に入學致され候。
- 其他の諸氏より來翰のまゝ左に掲げ候。

時下酷暑愈々御清道之事と奉存候。「求道」雖有項賦此頃退風の折、二度も三度
も繰返し讀破仕候。漢異鈔も末燈抄も折々開き居候得共、附に落ちざる處のみ
これあり、愈々地獄は住家と覺悟仕候。「外に賢善精進の相を現して内に虚假を
いだくを得ざれ」との句を讀みて戰慄の外無之候。穴賢々々

陸奥中津郡郡温温泉赤格子方 葛原運次郎

仙臺にてはまだ時鳥がなまします。一句左に

種のかげがひもなしほととぎす

仙臺にて 佐伯正

三

拜啓酷暑の候益々御清道大賀此事に存候。(中略)師省後日々讀經と布教に引廻
され忙殺罷在候、乍併、青田縁樹滿目一碧日々書きタテの水彩箇の中を徘徊致
候事は、またみやこにては夢にだも見る事の出來ぬ光景に御座候。小生は九月
上旬中に東上の心算に御座候。先は常用のみ重されて可得貴意候。勿々敬具

岐阜縣養老郡日吉村 藤井專 隨

四

寸翰拜呈
愈々暑くなり申候。八月一日にはこゝにてはタナバタ祭の初日に候、小春にあ
てられ四日間水浴び流行を廢し居候。今日は午後より参る積りに候折角樂みに
せる大澤の講習會も此分にては列し兼ねること、あきらめ居候。先生の出立は
間近きこと、存候へども私参り兼ねる事本意なく候。よきやうに御取計被下度
願上候

八月一日

五

先日は失禮、彼の夜より暑氣まげにて大熱を起し、散々の目に逢ひ丸茂病院に
泊り翌日無理に歸り候處、再逆襲に逢ひ更に劇しく攻め付られ、散々道々の体
にて今日辛うて床を出て申候。御通知延引不惡御思召被下度候

芽ヶ崎にて 鈴木車 苗

六

筑波にて 穴澤清次郎

其後は久々無音に打過居り候、土用に入りてより流石暑氣と相成候。今夏近角
先生當地に御出被下候は大早の雲霓の思ひに喜び居候。願くは當地の精神界の
爲め、御佛の光先生を通して發揚せられむ事祈り居候。花巻も當地も準備に慮
りなく、ひたすら先生の御來向を待ちうけ申候。

盛岡 波岡茂輝

七

故山は樹線にして氣亦清らかにして至極夏期の修養には適し申候。小生は日々
信仰の餘瀝拜誦罷在候。先は不取敢御禮まで早々

福岡縣築上郡 安村曉 雲

八

此頃の暑氣には殆ど閉口精進の勇も御座なく、枕と親み居候。當地さへ如此御
座候得ば、御當地は如何程かと案じ居候。御高堂御清道に御座候は、何よりの
事と奉存候。求道諸兄上京被成候や、波岡氏は十五日とか承り候同君の到着す
る頃は多分「バーヤ」を習め居らると羨み居候。僕も廿日頃水道の樋口より冷水
浴をやる意氣込甚だ強く有之候得共、俗用の爲め八月末九月初めと延引致候。
(中略)

陸奥 運次郎

巢鴨監獄を觀る

劍 虹 生

七月九日

●佛教青年會夏期講習會の催して會員打揃ふて、午後より

巢鴨監獄參觀の事となつた。勿論初めから山上典獄の許可を得たのである。一行四十人、近角氏が先達となられた。嵐車に乗つたは乗つたけれども、僅かに十五分、上野驛——大塚。此日は曇り勝ちで、陰氣でむし暑くて、いまにもふりそうていやな日であつた。大塚あたりは草深い片田舎で、茄子や瓜の花は見事に咲いて居る。淋しいが何となく趣味がある。大塚驛を下れば早や赤煉瓦の一角は巍然として聳えて居る。云ふまでもない、目ざす監獄である。日本一の模範監獄である。

●誰でも驚くであらふ、儼然たる山上の城であることを。囚徒それ自身でも驚かれずにおられまへと思ひつゝ、いかめしき鐵門をくぐらむとする一刹那、余は先づ高慢の頭を打たれた。而して門衛笑ひぬ。余も苦笑した。

●近角氏は典獄室へ行かれた。一行は休憩所に入りた。此處には囚徒に面會を求むる注意書が張り出されてある。用意周到なものである。中に面會の人は子供を連れ來ることは宜しくあるまいとの事があつた。これは子供の教育上好き注意であると思はれた。

●暫くして原教誨師に遇ふた、武田教誨師にも遇ふた。こんな場所て知己に遇ふことは楽しく感ぜられた。況して囚徒が、絶海の孤島にあると同じ境遇だから、親戚故舊に遇ふことはどれ程嬉しいであらふ。恐く空谷跫音を聞くの思ひがするであらふ。

●又暫くして典獄室へ導かれた。長い廊下を一直線にゆき盡くして左に折れた處、即ち山上長官の室である。二三ヶ月

以前新任せられたをうて、斯道の經驗家で、評判のよい典獄である。

●どちらかと云へば丰舉らざる方だが、温厚で着實なる態度が一見して其面にあふれて居る。宏量にして人言を容ることは凡ての場合に通ずるが、殊に司獄の任にある人最も留意すべき事である。山上典獄は慥に其人であるといつて居つた、今實際其音容に接して尙更お床しく感ぜられた。

●典獄は一行の請ひを容れて参考となるべき事を彼は二十三分述べられた。有益なる談話であつた。乃ち今の監獄は全く感化主義でなくとも、少なくとも、彼等を保護して悪を行はしむべからざるは、其目的であるとの意味を述べられた。

●彼等を保護すると云ふことは、其罪を惡むて其人を罰せざる古人の旨に合するので、司獄の目的はかくなげねばならぬ、又かくあるべきである。が、彼等を保護すると云ふことは、最も苦心の存する所て、若し世に感化事業ありとせば、これより、大なる感化はなからふと余は竊に感じた次第であつた。勿論感化事業とは區別せねばならぬとは云ふまでもない。

●山上典獄曰く、囚徒は決して惡むべきものではない。再犯、三犯、四犯と罪をかさねるか如きは、全く社會の罪也。少くも其一半は社會の人の負擔すべきものであらふ。一たび刑狀持ちてある。赤い着物を着た人であるときけば、互に相戒めて近くを欲せず、導かんとせず、業務を興へんともせず、却て社會の邪魔物にするが爲め、彼等は生存競争の場裡に立つ以上は勢ひ不正の事を働かざらむとするも働かざるを得

んのである。これ社會組織の欠陥にもよるが、罪人の絶ゆるなき所以である。

●又曰く。よし社會に貧民絶えずとするも、之を驅りて窮民に追ひつめ、遂に社會の不具者とならしむるとは、社會の罪に歸せざるを得ないのである。社會に此欠陥ある以上は監獄内に於てのみ如何に之を保護し、感化し得たりとて、一たび彼等をして自由の境に放つとき、亦再びもとの悪性に立ち返りて、幾度となく獄門を出入することとなりて、結局監獄の目的は其効果を奏せざることとなる。幸に諸君の當監獄を參觀せらるゝとは余の幸榮とする所て、諸君は社會と云ふことに注目せられむとを望む。最後の一言深く一行の腦裡に刻まれたやうであつた。

●余は監獄と社會との關係に付て多少思はむではなかつた。併しこれ程深く適切に考へなかつた。司獄官の苦心があり／＼と鏡に映つるやうであつた。犯罪の減少を來すには司獄官と社會と相待ち相扶けて、之を感化し防遏することに勉めねばならぬ。監獄改良も急務だが社會組織の改良も決して等閑に付すべきでない。

●模範監獄丈あてり規模の宏壯なる大厦高樓を欺くに足る。それも其筈である、建築費に四十萬圓もかゝつたをうた。今日ならば百萬圓も要するをうたである。むかしの懲戒主義より云へば囚徒を容るゝには勿体ないやうに感じた。けれどもかゝることは心に思ふべきではない。彼等も人の子である、佛の子である、吾等の同胞の一人である。寧ろ其境遇を憫察せねばならぬ。彼等自身の罪と云ふよりは、社會それ自ら彼等を

陥擠してこゝに入らしめたのではないか。

●吾は典獄室を出て長い廊下にはし足留めた。一陣の清き風は面を掠め去りた。こゝにも自然の恵みはあり、思はず感謝の念に打たれた。殊に桐の青葉は獄窓と相對して詩趣を添え、小雀の彼方此方を飛び廻はつて何を囁ぶるにや、それとも囚人の愁を慰めんとか。されど彼等は此の自然の大なる賜に對して、大方あだに過すであらふ。

●余等一行は二組となつて、右と左の路より分れて教誨師と、看守との案内につれて一巡するととなつた。既に監獄參觀と云ふ、何か見物でもするやうに思れた。處が先づ初めに病める囚徒の室に導かれたためか、少なからず同情の念に驅られた。其回める眼、青白き顔、其力なき足、其の憂ひある色、重きものは仰臥し、輕きものは危坐し、枕頭一瓶の藥淋しながら彼等を守るのみ。慰むるに友なく、訴ふるに人なし。心中の寂寞思ひやるだに胸塞がる心地がした。余は彼等の宗教心の有無は知らぬ。若しも、温たかき佛の心を宿してあるならばどれ程、力強く感ぜらるゝであらふなど、心に思ひ浮べつゝ、他の檻房へ導かれた。

●こゝは左右兩側檻房となつてある。先づ入監者の初め二三日はこの室に入るゝとの事である。余は檻房内に入りて見た、小窓はある、けれど高い。一隅には洗面所がある、他の一隅には便所がある。此中で食事もとるのである。云はゞ淨穢不二の境である。陰氣で吸呼が苦しい。こんな室に居るとは一時間でも堪えかたと思ひがした。

●次て教會堂に導かれた、ちやんと儀式が備つてある。余

は阿彌陀様に向て静に御禮を遂げた。堂は一見狭いやうであるけれども八九百人を容るゝとの事である。教誨の効力は無論有効であらふ。囚徒と近接して内部の事情をき、取り同情を寄せ且つ出来得る丈、彼等を保護するに便利の地にあるものは教誨師である。若し看守が嚴を以て臨むならば、教誨師は寛を以て當らねばならぬ。父は看守ならば、教誨師は母の役命である。大事、小事凡て彼等は教誨師の前に訴ふるのである。教誨師は囚徒の心を忖度するに及ばぬ、只一片の同情を以て之に臨めばよいのである。極端に云へば欺くまゝに従ふがよい、而して教誨師はそれとなく其不心得を諭すがよい。さけば本監獄の教誨師は時々檻房に入りて囚徒と相對して特別教誨を試みらるゝとの事。定めし成績の見るべきものがあるらふ。教誨師より色々々々、たい事があつたけれども、時間なきを以て遺憾に思はれた。

●三階には、追つて圖書閲覧室を設けるとの話であつた。

●炊事場も見つた、風呂場も見つた、なか／＼大仕掛である。

囚徒はわざ目もふらず、せつ／＼と働いてゐる。浴槽は二十人を入れるに足る、電氣仕掛であるから十五分以内に入浴し得るとの事。蒸飯だから頗る旨く出来て居る。豆腐も製造してあつた。二千人以上の食事をこしらへるのだから、骨の折れる事であらふ。この處で余等一行の一組に出遇ふた、丁度真中頃でもあつたらふ。

●それより囚徒の作業場參觀した。宛然たる規律正しき大工場である。高い處で看守がいかめしく見張りてゐる。隅から隅まで一語も一撃も發するものはない。響くものは器械の

音ばかり、動くものは目と手とばかりである。或意味に於て軍隊組織である。軍隊には精神的動作が伴ふけれども、こゝには全く形式的である。いや／＼ながら働くのである。其日、一日を過せばよいのである。働くなどと云ふ精神は微塵もない。若し彼等にして働くと云ふ精神があるならば、元よりこんな處へ来る筈がない、怠けもの、放逸の仕方のないもの計りだから、無論働く氣がないのである。形式的なりとして深く尤むべき事はなし。

●足袋、草鞋、傘、彫刻、繩、機織、其外色々の種類があつたやうに思はる。陸軍省や、逓信省の仕事もやつてあつた。他の諸負もあるやうだ。一人前の腕をもちてゐるものも澤山入監してゐるであらふが、其者に取りておしい事だ。彫刻物を見るに手際の奇麗なものであつた。囚徒の働いた賃銀によりて監獄費が支出せらるゝてあらふやうに思はれた。これは素人考へて迎も其一半を支ふるとはかたいたのである。歐洲の極めて完全した監獄ですら一半を支ふるとは容易ならざるとの事である我國全体の監獄費は總て六百萬以上で、成績を挙げた處で一百萬圓の賃銀に上れば最上であるとの事である。監獄經濟上より見て研究の好問題である。山上典獄の意見をき、洩した。長期もあれば短期の人もあり、犯罪者の増減もあるから一定の豫算を立つるとは到底出来えられまい。

●囚徒によりて内役もあり、外役もあるが、耕役に服してゐるものもあるやうだ。併し畑の手入が多いやうであつた。幾棟の工場をめぐりて表面より觀察すれば、何れも從順で規律正しく働いてゐるやうだがいつのまにやら監督者の目を盗ん

て怠けるをうだ。其日の業務例へば機織物なれば一丈とか一丈二尺とかにきまつてゐるけれども、それが満足に規定通り織り上げるものがないやうだ。彼等囚徒は丸て手がありても手のない不具者と同じやうなものだ、どこまでも彼等は不具者を以て甘ずるらしい。

●以上にて兎も角も内部を一覽し終つたのである。最も余等一行二十人列をなして、素通りしたばかりで、詳細にきゝことも出来ず、委しく觀察も出来ず、只臚ながら監獄に付ての概念を捕へたのみである。

●囚徒の現在数は二千五百五十人餘で、昨年の統計によれば九千人以上收容したとの事である。多く再犯以上であるときいて益々社會組織の欠陥を感じた。

●監房数は三百以上だが、獨房は少ないやうだ。囚徒の雜居は所謂玉石混淆で感化上非常に影響を來すとの事である。監獄經濟上止むを得ぬやうだ。

●囚徒を想へば直に連想を起すは容貌である。其險惡なる顔、にくげなる態度、一々浮べ來りて心膽を寒からしむ。君子は容貌愚なるが如しと云ひ、又形を以て人を採らずとの格言あるが、今、目前に多くの囚徒に接し果して其言の空しからざるを證し得た。どうしてこんな人が罪を犯したてであらふと不思議に思はるゝ位風采のよい貴公子然たる囚人もあつた。殊にいとしく思ふたのは二十の上り坂を二つ三つ位の血氣盛りの青年であつた。何の罪かは知らぬ、前途洋々たる望ある若者にして浮ぶ瀨なき淵に沈むとは残念に感じた。

●余等一行出来得る限り同情の念を濺きつゝ參觀したので

ある。されど囚徒の眼より見れば我等は馬鹿物に見ゆたであらふ。余はつく／＼思ふた、若し此中に自分の身の中の者一人でも居つたならば、どんな感じを起すてあらふなどと妙な愚痴を起した。

●囚徒に惡まれ役は看守だやうだ、これは止むを得ぬ事である。社會を喰ひつめ、荒れに荒らした所謂惡漢相手の事であるから、勢ひ鞭も擧げねばならぬ、さびしく叱責もせねばならぬ。彼等は一寸のすき間があれば看守の目を逃れやうとする、看守も亦容赦なく彼等を拘束するのだから、どうしても看守對囚徒は犬猿の怨みとなる。看守の職務より云へば囚徒を惡むべき筈はない、多人數を取締りてゆくには嚴格を主とせねばならぬから、囚徒には自然に胸惡く感ずるのである。看守の職分を察して自ら修むるやうな者ならば、こんな處に來る筈がない。看守と囚徒と精神的に其間一條の脈絡が通ずるならば、監獄の目的が大半達したものと云ふても過言でなからふ。

●若しも看守にしてたゞ獄則を勵行するに止まるとせば、典獄又は教誨師が如何に教化の事に心を勞するも、所詮好結果を見ることは難いのである。感化上の事は一に教誨師に委任したりとせば二千人以上の囚徒に對して五人や、六人の教誨師を以て之が任に當ること到底不可能の事である。山上典獄は看守に對して如何なる意見を有してゐらるゝか、之をさぐの機會を得ざりしは返す／＼遺憾であつた。

●作業の事に就てもう一とつ思ひ出る事あり、經濟上の問題元より重要であるが、可成囚徒に職業と云ふ觀念を興へし

め、善良なる習慣を養はしむることは必要でなからふか。從來の放逸を防ぎ社會に出て、正當の職に就く素養を興ふるのが寧ろ主眼であるまいか。而して經濟問題に移るも敢て遅しとせざらむ。

●書籍は大抵一定して居るをうだ、病める囚人に對して特別に拵ふも、人情の上よりみてよき方法ではあるまいか。

●監獄改良と云ふことは極めて必要である。併し建築物の改良のみを以て本旨とするならば、それは枝末の改良で識者の取らざる處である。根本的の改良は人にあることは云ふまでもない。むかしより、酷なること獄吏の如しと云ひて、如何にも獄吏は冷酷であるやうに思はしめた。今日と雖も、尙其傾向は存せざるか。たゞ長官の命を奉ずれば足る。獄則を勵行せば任務の盡きたもの、やうに思ひ、囚人に對して牛馬の掙をなすが如きは、斷じて改めねばならぬ。其役人風を吹かすことは囚徒に取りて第一に不快を感じるやうである。

●囚徒を感化し保護するには、宗教、倫理欠くべからざるは論ずるまでもない。而して彼等をして適切に感動を起さしむるものは、彼等の人情の弱點を捕ふるにあり、彼等惡漢も、亦人也。人情の秘密は固く握らつてある。弱點を捕ふるとは其鍵を取り、其扉を開くとである。一たび看破せられた以上は惡漢の常として惡に強きもの亦善にも強きものである。改過遷善の功こゝに始めて成る。而して説くに宗教を以てし、倫理を以てせば、彼等は教誨師の前に立てば、宛として小兒の如く、教誨師の一言一行は惟命従ふに至らむ。

●自由を得んとして却て不自由の天地に入る、彼等の運命も憫むべきである。もと彼等は社會の不平等である。不満足の中に一種の満足を見出すとに勉むるは、教誨師の任務ではあるまいか。

●監獄は大なる家庭の如し、宗教なき家庭は寒き冬の日で

出征軍人に與ふるの書(其二)

四

近角先生小子は近衛師團の一兵卒、もとより一丁字だに知るものに非ず。今從軍して清國○○城に在り、近日將に○○に向ふて出發せむとす。小子が東京青山近衛師團○○隊に在りし時、屢々先生の求道學會を助ふてこの譚をきき、また故清澤師より先生のとなりなき、常に景仰の念に堪へず、一たび左右に待て恩なる胸臆を訴へむとせしも、本年〇月〇日國に上陸せし已來、軍事繁忙東西萬里相隔り、遂に今日の境遇とはなれり。此千載一遇の時に際し、身を國家に殉するを得るは極めて本望なるも、先生に對して直接に吾煩悶を告ぐるを得ざりしは眞に遺憾なり。先生にして一片小子を憐むの情あらばせめては今後毎月先生が手になれる求道雜誌を惠贈せられよ。せめては之によりて所望を慰む。雜誌を戦地に送ることは許可せられ居れり。若し願を許されむには表記の名宛にて届き申候。

六月五日

近衛師團第〇野戰病院

孫 木 松 之 助

拜啓仕候。御熱心なる求道の御精神と濃かなる御厚情の溢る所、唯々感激堪へ難く覺え候。御來示に隨ひ早速雜誌從來發行の分皆々差上度存じ其運びに致候處、其後規定相變り申候ものによ、新聞を戦地に送ることは許さるゝも雜誌は許されずとの事、其様な理窟はあるまじと存じ幾度か郵便局に尋合せ候へども聞違無之、甚だ心苦しく數日を経て、遂に再三郵便局に其方法を尋ね、其注意により既に差上申候通り、密封の上書面として御遞送申候次第に候。夫か爲め最新發行の分丈に止め猶嘆異鈔一部封入致置候、定めて何れかに於て御落手下され御熟讀を賜はる事と存居候。御覽の後、如何に御胸中に如來の御心の届き候や、一筆御しらせ下され度願上候。

何よりも最も心に掛り候は御書中に「先生に對して直接に吾煩悶を告ぐるを得ざりしは眞に遺憾なり」との御一言に候。私も煩悶につきては大經驗ある次第に候故、何人に對しても其苦悶の様子を見るときは同情に堪へざる次第に候。先日来大澤夏期講習會にて多數の信仰者を生じ、唯々不可思議に感じ候へども、愈其地を出立するに臨み最も心残り致候は、煩悶熱心に道を求めらるゝにも拘はらず、未だ其人が御光に接せざる前に出立する様な場合に候。親戀聖人、關東の傳道を終りて京都に歸らむとし、將に箱根を越へむとし玉ひし時。數十年の親しめる信徒を想出し性信房をして踵を回らして

如來の作願をたづぬれば、
苦惱の有情をすてずして、
大悲心をば成就せり、
回向を首としたまひて、

とある味ひ玉ふべく候。多くの人が苦悶を叫ぶことを知るも、慈光を仰ぐことを知らず。渴を叫ぶことを知るも、徳水を味ふことを知らず。目を閉ぢて暗を嘆き、水中にありて渴を訴ふるに異ならず。首を回らし玉ふべし。如來の光明は既に頭上を照し玉ふにあらずや、如來の招喚は明らかに心の中に響くなり。私も苦悶致し候時は口には御佛を叫びしも、少しも嬉しとも難有とも感ぜず候ひき。後よりみれば人生と佛とを遠く離したるにて候ひき。人生此の如く苦しく、父母と雖之を救ふ能はず。兄弟と雖、之に代るべからざるの境に臨めるに、獨り佛陀の大なる力と大なる慈悲と歸り止らしめ、病む子をば預けて歸る旅の空しは後に残りこそすれ」と詠じ玉ひし昔を忍ばれ申候。今貴氏の御一言をききて實に同様の感に堪へ不申候。若し直接に拜承したらむには不肖も遺憾の情禁じ得ず候。併、人間は其人の境遇に隨ひて種々の煩悶に苦み候へばこそ、初めて佛陀の慈光に

ある。早く温き春の日を迎へて靈光に接せざれば、圓滿なる家庭は望み得られない。宗教は教誨師の專有物の如く心得ておるは間違の甚しきものにして、長官信せず、看守長信せず、看守亦信せず。かくして囚徒にのみ強いてすゝめんとす、覺束なき話である。今の監獄に之を望む自ら無理なるを知る。けれども將來かゝる精神をもたずしては根本的の監獄改良は一種の空論たるに過ぎぬ。宗教は人心を支配し統一するものである。上長官を始め、下門衛に至るまで悉く之を信せば、感化の上に希望の光、輝やき目的を達する敢て難しとせず。

●宗教ある家庭は精神的に一致するのである。監獄の機關を運轉する人々にして精神的に一致すると云ふとは、どれ程力強く感ぜらるゝであらふ。互に一致して囚徒の前に立つ、向ふ所靡かざるものはない。

●囚徒は殊に恐怖心に富む、從て邪推が深い。之を矯正する宗教の力を籍るより、外に方法があるまいと思ふ。

●看守の勤続年限の長短によりて、感化上の影響は尠なからざる事と思はる。

●約一時間半ばかりの參觀で、全く表面上の觀察に過ぎぬ。以上は順序もなく秩序も追はず、たゞ胸に思浮べるまゝ、記したるのみ。専門家より見れば一笑に付すべき事のみ多いてあらふ。まゝ卑見を録したるは余か平素監獄に對する所信の一端を洩したる次第で、敢て他意あるにあらず。門外漢の吾等の力にては模範監獄に對して固より彼是と批評し得らるゝものではない。却て典獄はじめ教誨師諸君の種々の指導によりて有益なる教訓を興へられたるを深く感謝するのである。

●雨はこやみなくふる、胸の思ひは燃ゆる。やうである。これ余が歸り路の光景であつた。

も接するを得べけれ。苦痛も煩悶もなき人には慈悲も佛も不用たるべしと存候。抑々佛の來らせ玉ふ根本は、我等が無明のあればなり。佛の願を起し玉ふも、我等が苦悶を救濟せむが爲なればなり。聖人の和讃に、

無明の大夜をあはれみて、
法身の光輪さはもなく、
安養界に影現する。

は満身の同情を以て之を融化せしめ玉ふにあらずや。佛とは寧ろ此慈愛の塊なりと稱するを適切也と感ずる様に相成り候時。初めて生ける御佛に接し、直接御佛の御心に通ひて、常に慈光に浴することを感ずる様に相成申候。願くは貴氏苦悶に沈み玉ふ時は此御佛にすがり玉ふべし。幸に直接に御目に掛りたりとも申上ぐるは唯此一點に候。若し此御心をだに頂き玉はゞ、夕トヒ海陸千万里を隔つるも、且暮に御遇ひ申上げ候も同様と存候。

貴書に清澤先生之御事仰せ下され、如何ばかり陰に陽に手を引き下され候御事と仰き奉るの外無之候。先生の一生は私に對する生ける御戒めと存候。我々は一日も清澤先生の如くは行ひ得べからざるも、我々は佛の如何に清らかなるか、又衆生の爲には如何に忍耐し玉ひしかを清澤先生の生ける實行によりて知ることを得べしと存候。先生の逝去遠かるに隨ひて益々懐かしく感ぜらるゝ次第に御座候。貴書御認の日は實に先生一周年退夜の日には有之候事、定めて御氣附きなき事と存じ候へども、偶然ならず相感じ申候。而して此書は大澤講習會の歸途仙臺道交會自炊寮に泊り、恰も清澤先生遺像の下に相認め申候次第に候我々國民内地に在りて心安らかに日暮し致し候を得るは、偏へに遠征諸氏の御蔭による事と感謝の至に不堪候。既に雜誌は御請取被下候事と存候へ共、其後度々の戦も有之候事なれば今頃は何れ迄御進み相成候哉、又如何御安心被遊候哉、御案じ申上此書を差上げ申候。唯々慈光遙かに軍陣の中を照して、歡喜貴氏の胸に宿り、劍光砲聲新たなる意味を持來さむことを祈り奉り候。頓首

八月十六日

塚本 松之助様

仙臺道交會に宿りて

近角 常 觀

五

(前號窪田君手紙參照)

拜啓仕候。旅順大海戦の報に接し國民は擧て諸氏の殉國的精神に感激仕候。特に貴艦の御働の著しき事唯々感謝の外無之候。全艦供給の中心に當り玉ふ貴兄は如何に敏捷に且つ沈靜に御働き被成候事と、アリク面影を見奉る心地仕候。平素信仰問題に御傾心被成候貴兄は此際通常經驗し得べからざる境を味ひ、心ずや砲火鐵艦己上の偉大なる力を感じ玉ふこと必然なるを確信仕候。蓋し信仰は萬人同一なれど、艱難に處して其力を顯はし來ること、水流の支ふるものなければ平かなるも、岩に激せられて奔騰其力を顯はし來るが如きものに候。貴兄必ず靈感の胸裡に湧くが如きものあらむ。不肖公報によりて兄が健全なるを確知し、覺えず佛天に向て感謝し奉り候、頓首

八月十六日

窪田 某艦主計長様

近角 常 觀

主筆 横井時雄 姉崎正治

時代思潮

毎月一回 本號目次五日發行

第七號

八月五日發行

定價

一冊廿錢 郵税一錢五厘 六冊郵税共
壹圓廿錢 十二冊郵税共貳圓卅錢

口繪

○サイドロイテル筆「若がへりの泉」○聖路易萬國大博覽會式場建築物○日本郵船會社所有汽船日光丸談話室

思潮

○韓國政治上の改革○敵國降伏、領土の擴張○戰時佛敎家の言行○固く其分を守れ

論議

○對商事裁判所意見(梅謙次郎)○神聖獨裁理想を評す(横井時雄)○時局と敎育及敎育の目的(菊池大麓)○基督の人格に關する考察即基督論(菊間國造)○自然力の發展(牧野啓吾)

想苑

○救世者法然(惠美孝三)○塔影(石川啄木)○平家没落(林篁水)○戰と小兒平尾不孤補(齋藤淡水譯)

雜纂

○形成美術に於る日本(一)(編者抄譯)○ラスキン戰争觀(中)(内ヶ崎作三郎)去勢論(勁林坊)○ロンドン片信(流光生)

時評

彙報

○觀戰日誌(横井時雄)○日露戰史要略
○經濟時事
本年上半季の貿易▲豫算外超過支出▲物價下落▲本年春の物價▲商品騰貴▲買物拒否問題▲郵便貯金の増加▲外人の日本事業投資▲白耳義萬國博覽會補助▲生糸輸出の禁止▲日銀利子引上▲日米銀行開業の懸念▲戰時と清華貿易▲筑豊鐵業の趨勢
○海内思潮
精神的慰勞を支へよ▲出征軍人子女敎育▲日本美術工務品に就て▲信仰と戒律▲官廳文字
○海外思潮
○海外革命
○海外革命の價值▲戰後の問題▲南山激戰と露都▲露國と革命
○内外雜俎
日本開港式▲リハレン島事情▲英人安徽省鐵山探掘▲日本酒の改良▲智利國買艦問題▲進歩黨幹部▲京釜鐵道工事問題▲三韓議員總選舉▲南阿金剛石の大利▲日出度明年▲三韓議員總選舉▲南阿金剛石の大利▲非波蘭說獻上

挿畫

○日光丸船體▲露兵軍律施行▲天龍勝峽
▲風景畫ボンチ數葉

哲學館大學 學生募集廣告

九月上旬大學本科及豫科補缺募集
●郵券二錢寄送あらば規則書に貧生學資支辨法を添て贈呈すべし
東京市小石川區
原町
哲學館大學

歎異鈔

全

右今回本學舎より出版仕候。紙數四十三頁、施本として最も適し候。定價は左の如く候。
○一冊三錢、百部以上一冊に付二錢五厘、郵税三冊まで貳錢の事。

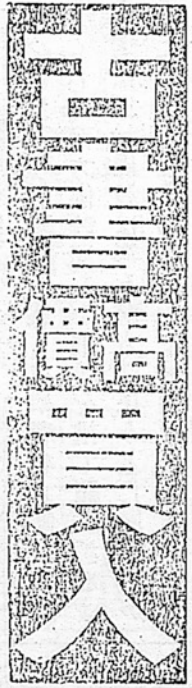
發行所

東京市本郷區
森川町一

求道學舎

●德香社は、廣く、内外諸種の煙草を販賣致します。
●德香社は、煙草の品質を保險し且つ。特別の廉價を以て販賣致します。
●德香社は、遠近を問はず、多少に拘はらず、御注文に應じて配達致します。
●德香社は、營業上の利益を擧げて、悉く、社會的慈善事業に充用致します。

(主)池山榮吉 (管) 德香社煙草店
(電話二二〇二番)



多少に拘わらず何書にても(佛書和漢洋書)大奮發高價に御買受申候遠隔の地方は書名冊數等御詳記の上御照會相成候得は價格御答申上候

買入所 森江本店
東京飯倉町五丁目(電話新橋二九七二番)

曉鳥敏氏評序 楠 龍造氏著

他方宗教論

並製三十五錢 稅四錢
上製五十錢 稅六錢

四六二頁六十頁

本書要目

他方信仰は宗教の極致なり。
◎一切の門戸は他方信仰に達す◎常識と他方信仰◎倫理と他方信仰◎他方の啓示する所にあり◎智識と他方信仰◎苦樂と他方信仰◎他方の本願◎他方の三信◎他方の名號◎他方の行信◎他方教の佛陀佛國◎他方教の現世生涯◎他方教の發展◎他方教の地位及使命◎鎌倉時代の親鸞聖人

法然親鸞二師の比較

◎親鸞聖人と使徒保羅◎阿闍世王論◎韋提希夫人◎信仰行程の三譬喩◎日本文學上に於ける他方教思想◎薄伽梵歌の他方宗教等

文學士 清澤滿之氏著

精神講話 第四版

△四六版二百頁
△正價 金三十錢
△郵税 金四錢

醫學士 坂田 實氏著

法新刊
△寸珍 美二
△價十五錢 稅二錢

文學士 近角常觀氏著 好評第二版

信仰問題

△寫真數十葉 上製六十五錢 稅十錢
△菊版二百五十頁 並製五十錢 稅八錢

東京日々新聞批評

著者近角文學士は近時佛敎界の秀才として氣焔家として頭角を現はせる人、歐米に遊ぶこと多年、遍く世界宗教の趨勢を察して本書を著はせり。其説内篇、外篇に分ち内篇に於ては實驗の宗教、哲學の研究が佛敎信念の消長に與へし害毒、倫理問題の解決如何社會に於ける内的制裁力の養成、學生間に於ける信仰の勃興、活ける讀書と清新なる信仰、信仰と苦悶、修養論、外篇に於て宗教問題解決の要點、英國又其宗教界、宗教形式の變遷、佛敎の見地に立ちて社會問題を解決す、社會の根底的改造、歐米各國に於ける宗教の特色、宗教的經營及社會事業を論ず。引證該博、識見高邁而も空疎ならず、近時佛敎界の一大著と云ふに躊躇せず。

文學博士 井上哲次郎氏著

釋迦牟尼傳 第十二版

並製六十錢 稅八錢
上製八十錢 稅八錢

敎界偉人叢書第一編小野藤太氏著

弘法大師傳 最新版

並製四十五錢 稅八錢
上製六十錢 稅十錢

文學博士 南條文雄氏 舟橋水哉氏著

小乘佛敎史論

並製五十錢 稅八錢
上製六十錢 稅十錢

萬朝報の批評に曰く

南北佛敎等しく之れ佛陀の敎理なり然るに學者北方佛敎の研究を爲すもの多くして南方佛敎即ち小乘敎を措て顧みざるは何ぞや歐洲の學者は原始佛敎は寧ろ南方に在りとし夙に之が研究に従事し既に原文の經典に通曉し之を翻譯し或は之が註解を試みたるものすらあり本邦に擴布せる佛敎は大乗敎のみにして其の小乘敎と云へるは僅かに律宗の一派あるのみなれば學者の一顧を得ざる之が爲乎著者深く之を遺憾とし多年の研究を経て本書を公にせり全篇十二章最も世親の研究に重きを措けり小乘の原始は佛陀に在りと雖も之を大成したるは世親なれば也故に之を一部の世親傳と云ふも不可なきに似たり世若し南方佛敎を知らんと欲せば一たび本書を細く可し本書實に其の好津梁たる可し

文學博士 前田慧雲氏著

大乘佛敎史論 第三版

△菊版三百二十頁 餘
△並製七十錢 稅八錢
△上製九十錢 稅十錢

敎界偉人叢書第二編野哲氏著

聖德太子傳 最新版
△菊版二百二十頁 餘
△並製四十五錢 稅八錢
△上製六十錢 稅十錢

佐々木月樵氏新著 好評第三版

實驗の宗教

△菊版三百二十頁 並製四十五錢 稅八錢
△惣四號 活字 上製六十錢 稅十錢

國民新聞批評

本書は、我國宗教的偉人のあとをたづねて、適著者が人切に實踐修養の大義を唱道し、それによつて、**人格の感化**をうけたる實感の記載なり、**議論の壯雄**なる**カールライルの「英雄論」**に似たり、或は譬へ**趣味**と云ふは、**エマルソンの「偉人論」**に類す、**理論的宗教**の時代は已にすぎ去つ**高高**なる人格**信念**得**修養**する人々は、**是非一讀再讀**を要す、本書には我國に於ける宗教なるも併せ録せり

文學士 高瀬武次郎氏著

王陽明詳傳 最新版

菊版三百八十頁
正價八十錢 稅十錢

文學博士 井上圓了氏著述

佛敎通觀 近刊

四六版全二冊
上卷 三十錢 稅四錢
下卷 三十錢 稅四錢

文學士 清澤滿之師序
近角常觀君著

訂正第五版
増補

信仰の餘瀝

全

定價並製十五錢上製二十五錢 ● 郵税二錢 ● 郵券代用一割増

本書は、著者が活火炎々たる自家の信念を告白したるものにして、活ける懺悔靈感の妙趣此中に存せざるはなし、其説く所卑近に流れず、遠に失せず。平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りて、よく之を調理し少しも生硬の憂なく讀者をして、憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。

漸々版を重ねるに臨みて、著者自ら筆を執りて、或部分の如きは全く改竄するまでに、嚴密なる訂正を施しぬ。添うるに森嚴なる筆を以て自序をものし之を巻首に題し、且つ滯歐中日夕拜讀したる聖經に就ての所感一篇を附録とせり。句々皆金石の聲を發せざるはなく、字々悉く熱淚の痕たらざるはなし。苦悶の闇にある人、信仰の飢に叫ぶの士、來りて本書を緝けよ、光明界の指導者たるもの、それ必ず此書ならむ。

注文所

東京市本郷區森川町一

求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

● 廣告料五號活一字行二十七字詰一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十七年七月卅一日印刷
明治三十七年八月一日發行

發行所

東京市本郷區森川町一番地

求道發行所

(電話下谷二四三三)

大賣捌所

東京市神田區神保町

東京

堂

同

同

本郷四丁目

明

堂



性信房上京に付、其たよりに承喜び入候なり。ますく御信心ふかく候はしまし候由、何事よりも嬉しく候又かねて予が影御望の事此たびよき序と自刻いたし贈り参らせ候いよ候べし。御信心たじろかせ玉は御念佛まし候は、其地に性信順信をの外人々在候へば、よく候に御問候べし。いまに我等も存命に候儘、此方へも御尋候べし。唯何事も御はからひなく候べし。唯何事も御はからひなく如來に御まかせ玉ふべく候なり。他力に御心得候べし。穴賢

五月五日
彌女母方へ御返事
戀しくは南無阿彌陀佛を唱ふべし
我も六字のうちに心こそすめ。

